谷津干潟の自然緑地に、一日も早く野鳥観察舎を再建しよう！

ふかんど

第101号

1981.10.25

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五ノ六
電話〇四七三ー三八ー六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

〈子供のころ、ヒバリ・麦畑・菜の花畑・タンポポ・風車・オタマジャクシ・湧き水……と、みんなつながって思っていました。〉

自然緑地のヒバリの巣

× × × ×

テーブルとベンチがたくさん並んでいる所の、草ムラの中で巣をつくったのです。今年の八月にです。

自然緑地というのは、今から3年前に、私達自然保護団体と千葉県、そして企業庁の三者会談の結果、「自然環境を目的とした土地利用」が認められた所です。

広さは、約3haあります。今は、まだ広い草地が埋め立て地の中に、たくさん残っていますが、やがて、全て建物が立ってしまうので、その時は草ムラがなくなってしまいます。

今でも、カモ・クイナ・セッカ・ヒバリ・コアジサシ・シロチドリ・コチドリ・バン・オオヨシキリ・オオバン・カイツブリなどが卵を産んで、ヒナに孵っています。

しかし、いろんな生きものが生活するための、池・草原・砂地・ヨシ野・水草やガマのはえる所は、何一つ残す計画がありません。

やがて、谷津干潟の自然緑地は、年を追って、大事なものとなっていきます。3.1haというせまい所ですが、ここで、ある程度の希望はかなえられるでしょう。

写真の、ヒバリのヒナを手にしているのは、近くの団地に住む子供です。このように、自然緑地は、いろんな植物があって、池やヨシ野があり、そこに昆虫や魚、渡り鳥が安心して巣をつくり、子供たちが、じかにそれと触れ合う、自然教育と情操教育が目的です。テーブルとベンチの草ムラに今年も、ヒバリ・セッカ・ヨシキリが巣をつくりました。

ヒバリの巣の中は、こんなふうになっています。白いのは子供の指です。4匹います。

ヒナは、もう自分で歩けるくらい大きくなっていました。子供たちは見張りをしました。

お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

谷津干潟展のお知らせ

千葉相互銀行・秋津支店

ここでは、

・千葉県野鳥の会
・千葉の干潟を守る会
・谷津干潟愛護研究会

がやっております。

谷津干潟にいちばん近く、お客さんはみんな、とてもよく見ていきます。これからも、時々やってもらいたいとのことでした。

習志野市文化祭で

菊田公民館　千葉県野鳥の会と千葉の干潟を守る会が協力で。

袖ケ浦公民館　谷津干潟愛護研究会

10/25 ～ 11/3

この人、桑原さんを紹介します

桑原さんは、渡り鳥だけでなく、とくに、干潟の地面の中にすむ、カニ、ゴカイ、貝類の調査をしています。どんな鳥が、どんなものを、どれだけ食べるかということを、びっくりする位、よくやっています。

大学院生です。

こうして毎日のように調査しています。どんなに暑くても、寒くても来ます。

1978.12.17（毎日新聞）

反射鏡

失敗を恐れぬ活力

日本にも欲しい社会的柔軟さ

山本　潔（ニューヨーク支局）

米国で発行されている日本語のミニ新聞「OCS」の随筆コーナーに相原せつ子さんという主婦の体験談が最優秀入選したことがある。

トライ・アゲイン

彼女はなけなしの金をはたいて中古車を買ったばかりの新米運転手。雨でぬれた落ち葉にハンドルをとられて電柱に激突する。全身打撲、車はおシャカになる。最高に恋しい相原さん一家を米国人の主婦も日本女性もかいがいしく助ける。ジャネットは夕食を、キャロラインは氷マクラを届ける。だが米国人主婦は異口同音に「事故は事故よ。トライ・アゲイン（またがんばるのよ）」とはげまし、日本人の方は、「ドライブの方はもうご主人にまかせてあなたはやめなさいね」となぐさめる――というストーリーだった。

米国では山や川へ行くと、ここから先は「あなた自身の責任で」登れ、とか泳げ、とかの立札が多い。日本人の発想では「危険につき入山（遊泳）厳禁」とくるはずである。

ニューヨークでは昨年、山男が高さ四〇五㍍もある世界貿易センターの垂直な壁をはい登ったことがあった。人騒がせな、と型通り検挙されたが群衆は惜しみない拍手を送り、当時のビーム市長も山男にウインクしながら「一階につき罰金一㌦を申しつける。ビルは百十階だからしめて一㌦十㌣（約二二〇円）」と気のきいた裁きを見せ、以来、男はロッククライミングの英雄となってテレビにも度々出演している。

よく似た話が先ごろ東京でも起こった（十一月三十日、新宿住友ビル）。男は二度と騒ぎは起こさないという約束で放免されたそうだが、少なくとも当局の結論は「強引・暴挙」。彼が町の人気ものになったという話もないようだ。

三つの話を並べたのは、米国では失敗や多少の冒険は気にせず、恐れず、個人の好奇心や創造力を追求させる進取の気風とか、自己主張の精神が尊重される。日本では社会秩序の方に比重がおかれる。そのあまり、「個」としての活力は埋没ないしは発育不良のままに放置されがちではないか、と言いたいためだ。国際的なスポーツ大会二つをとっても、自己記録を更新できる日本人選手が少ない原因の一つは、事なかれ主義、平均主義の風潮にどっぷりつかっているために、個人の力だけが問われる正念場では、自信も薄れ気力もなえてしまうのではないか、と思われるがどうだろう。

米国人の生命力の根源は、開拓時代以来「自分のことは自分で」（ドー・イットーユアセルフ）で挑戦することによって「生き残る」（サーバイブ）ところにある。

この自由競争の土壌から、学校教育にしても徹底した英才教育主義で、できる子はどんどん跳び級する。十一歳、十二歳の大学生もいる。全米で二百五十万と推定される英才の芽を無限に伸ばすため連邦議会はことしから助成金を年間五千万㌦（約百億円）に増額した。落ちこぼれ防止、底上げ主義の日本とはこうも違っている。

もっとも日本管理社会、日本株式会社は暴走せず、しつけの行き届いた、均等化された力を結集することによって無資源国ながら国際経済戦争にも成功してきた。

米国に進出する日本のメーカーの恐れは同じ高校卒を採用しても、玉もあれば石もありで製品にも一定の水準を期待しにくいことだ。ノーベル賞の江崎玲於奈氏のことばによれば、日本の方は将校はいないが優秀な兵隊そろいで難局にもうち勝ってきたということになる。だが個人の可能性も伸ばせるよう、もう少し社会的弾力性を持たせることによって、日本の将来にはまた新しい展望も開けるのではないか。

米国が多くの問題をはらみながらも、全世界からの人種が住みつこうとするのも「トライ」を進めるのびのびとした空気のせいではないだろうか。日本にも植村直己さんのような勇者がいるが、大方は映画の「寅さん」あたりに失った心をまさぐっているようにしかみえない。

ふかんど

第102号

1981.10.26

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五ノ六
電話〇四七三ー二六ー六六六八
文責 森田三郎

会費 年2000

創刊 1980.6.3

＜今の谷津五丁目に、昔、うさぎ山というのがあって、干潟を見晴らしながら、野ウサギのはねているのを見えた。＞

これが本当のザ・マイカーだ

自分の車ですから、誰に気を使うことをないわけ。広告料というなし。タダで、走りながら谷津干潟を宣伝できる。「谷津干潟愛護研究会」という字は、商売人に書いてもらった。ところがである、これを書いているのはじいさんで、アル中の為に手がブルくふるえているのだ。夫婦で、軽自動車にペンキ道具を積んでき て、路上で仕事をしている。場所は、習志野陸運局のそばで、そこに来る車を目当に、この商売をするのだ。

「オレはよぉ、他に能がなぁーんにもねえしい、これをやってしかあメシりくえねんだよなぁーーー」。「でえ、オヤジさん、いつ憶えたんだい、これを?」。「うぅーん、ふんとはオレはよぉ、会社に勤めていたんだよう、とろろーが、あんまり酒が好きなもんで、とうくクビになっちゃったんだよなぁーーー」。「ふうぅんーーー、そう言えば手がふるえてんしい、さっきから見てたけどぉ、オヤジさん、赤っ鼻だねえ、よっぽど酒が好きなんだねえ、たいしたノンべえなんだねえー」。

十二月の末だった。時折り、ビューッと強く、冷たい風が来る吹きっさらしの所だった。紙クズがいくつも、シュルくと音をたててアスファルトの上を走っていった。砂ホコリが舞い上がり、じいさんのうすくなった毛が風にゆれていた。路上に板をしき、時々口で筆をくわえては、又書くのであった。小きざみに、筆を持つ手がブルくしたまま。私は、ただ黙って、手先のみを見つめていた。

ふと、その時、私は思った。もし、こうアル中のじいさんが、一文字六百円ぐらいで書けるのなら、私も、少し忍耐をして、何とか自分で書けないものか?、と。

「オヤジさん、子供たちは?、どうしてんだい?」。「みんな出て行っちゃっていねえよぉ、んでえ、オレと家内だけでえ、こうやって仕事してくってえんだぁーーー」。「ーーー」。

お振込は千葉銀行012－54253
谷津干潟愛護研究会

1981.10.24

のどかな谷津干潟

これからは、北風に身をさらす日が多くなっていく。干潟では、身をかくす所がないので、暑くても寒くても、それをまともに受けるのである。でも、その中にも、時々は冬真のように、秋晴れの温い、のどかな日もあるのです。これは、平日の午後です。上は若い夫婦です。サンダルで来て、持って来たイスに座り、二人でお茶をのみながらご飯を食べています。下は、幼児を自転車に乗せて、散歩に来ている主婦です。恰好からして、秋津か香澄団地に住んでいる方なのでしょう。こんな日には、乳母車に赤ん坊をのせて干潟に来る女性をあずらしくありません。

それとか、子供連れの主婦が近所の方なのだろう、みしろ人グループで干潟に来て、草むらにビニールをひげてお昼ご飯を食べているのを見ます。

朝日新聞

観光開発もう結構

自然保護志向はっきり

総理府世論調査

観光開発よりも自然保護が大切――総理府が二十三日発表した「自然保護に関する世論調査」では、①自然保護が大切だとする人が九四%と極めて高率に達した②「これ以上の観光施設整備は不必要」という自然保護派が半数を占め、観光開発派を大幅に上回った、など国民の自然保護志向がくっきり浮かびあがった。また、六割近くの人が政府の自然保護行政を手ぬるいと決めつけ、開発を優先させがちな観光行政も大きな曲がり角にさしかかったといえるようだ。環境庁は「国民の自然保護への関心が予想以上に高く、心強い結果だ」と受けとめている。

この調査は今年が自然公園制度発足五十周年に当たるのを記念して、六月下旬に全国で三千人を対象に行われた。有効回答は八〇・六%。

《自然とのふれあい》この一年間にレクリエーションなどで野外の自然の多い所に出かけた人は六六%。回数では「年に一―三回」が四二%と最も多い。

自然公園（国立、国定公園、都道府県立自然公園）には四五%の人が出かけ、利用率はかなり高い。利用目的としては「すぐれた景色を楽しむ」（四七%、複数回答）「登山、海水浴など野外生活を楽しむ」（四六%）をあげる人が多かった。

《自然保護への関心》「自然保護は大切かどうか」の問いには、九四%と圧倒的多数の人が「大切だ」と回答。「そうは思わない」はわずか一%にすぎなかった。大切だとする理由は、「自然は人間の心にやすらぎやうるおいを与えてくれる」が七九%と最も多く、次いで、「子どもたちの健全な成長や自然を学ぶ場として大切」の四九%。

自然公園内に観光施設を整備することは便利になる半面、自然環境を損なう場合も出てくる。こうした自然保護と観光開発との兼ね合いについては、「自然の美しい風景を守るためには、これ以上観光施設を整備する必要はない」とする人が四八%とほぼ半数に達し、「多くの人々が美しい風景に親しむために、ある程度自然が損なわれてもやむをえない」の二三%を大きく上回った。

《活動意欲》政府の自然保護への取り組み方については「積極的」と評価する人が二〇%であるのに対し、「消極的」は五七%と、手厳しい。一方、自然保護活動をしたことの有無では、美化運動、緑化運動などを実践したことのある人は三一%だったが、未経験者でも「機会があれば参加したい」と答えた人が二十代を中心に四八%に達し、活動意欲はかなり高い。

活動の具体例として、美しい自然や歴史的遺跡を市民の手で購入、管理している英国のナショナル・トラスト運動を紹介しながら、「こうした運動が日本でも必要か」と聞いたところ、六九%が「必要」と回答。うち半数は「金を出してもよい」と答えた。

日本でも北海道・斜里町の植林運動や、和歌山県・天神崎の海岸線保護運動などが始まっているが、環境庁では「国民の関心が高いので、国としてもこうした運動に協力することを検討したい」としている。

《自然公園管理》自然公園の景観の大敵は空き缶やゴミ。調査では、「持ち帰るよう十分指導する」が三七%と最も多く、環境庁の呼びかける「ゴミ持ち帰り運動」が理解された形。

また、開発に走ろうとする土地所有者との間でいざこざが絶えない自然公園内の民有地の扱いでは、「国、地方公共団体の買い上げ」（二八%）、「損失が生じた時は所有者に補償」（二五%）との意見が多かった。

《野生動物保護》トキ、イリオモテヤマネコなど絶滅の恐れのある野生動物の保護については、「世界的に貴重なものは捕獲し、人工飼育してでも保護すべき」（六二%）が、「自然のままにしておくべき」（二六%）を大きく上回った。現在、環境庁はトキ四羽を飼育しているが、「一応この方式が認められた」と受けとめており、今後、イリオモテヤマネコも、人工飼育を検討する。

カモシカやニホンザルなど人間生活に被害を与える野生動物については、「必要最小限の捕獲もやむをえない」との意見が三七%、「防護サクで動物が入らないようにする」は二五%だった。

多少は参考になる事を知れません。

ところで、谷津干潟周辺はどうだろう。

皆さん、いいですか、「ふかんど」は、ひろく万民の為なんですよぉ。原稿を下さいよ。でないとドンドン進みます。

ふかんど

第103号

1981.10.27

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市＊北方一一三五一六
電話(0473)一二一一六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

＜波打ちぎわの海草を集め、山と積んで干し、それをこやしにしていました。＞

「ふかんどし100号を越えて

10月19日に100号を作りおえた。あっさりと越えてしまった。

ある程度は整理できたと思う。これからは、ペースを下げていきます。そのわけは、お金がたまらないからです。今の心持ちは、この勢いづいたものにブレーキをかけるといった、そんな心境です。

もっと早くから、独立して、会報作りを教えておけばよかったと思う。そうすれば、今頃、300号ぐらいは出していたと思う。それまで、誰も、会報作りを教えてくれる人、又、そうした才がよいと、自然保護関係の中で言う人はいなかった。組織のワクを出そうなことは、何事によらず、いやな顔をされた。あるいは、公然と皆んなの前で無視された。

人によっては、ただメチャクチャに会報を出して来たと言うかも知れない。私も、広い見方をすれば、その中の一つの見方として、そう思えるし、むしろ、そう考えられても、その方が常識的かも知れないと思っている。

でも、私個人としては、自分の中に、何とか記しておきたいこと、今までに考え、思い、感じ、そして、日常生活の中でやってきたことが、ホントにいっぱいあると思っているのです。

私は、谷津干潟を、どうにかして残したいと思っている、多くの人間の中の一人です。私は、その生り立ちを含めて、ごく普通の、平凡な一人の人間として、谷津干潟を守る為に少しは努力してきたと思っている。

私のやってきた事などは、みんな、誰もが見ていて、知っていて、聞いていて、そして話しあわれていた事ばかりである。何一つとして、新しい、創造的な事はして来なかった。見なれ、聞きなれ、知り尽くされて、飽んで当り前のこととして見向きもされなかったものばかりである。その証拠に、自然保護や鳥や干潟、生きものなどについて私よりも知っている人は、いくらだっている。人より抜んでたものは、私には、何一つとしてないのを知っている。道ばたのものを拾って、どうしようと、考えて来た。

「自分に立つ――これが書しずきたり、お手本通りに……といったことにこだわっているの真髄である」（書道家 池田水城氏）

× × ×

新入社員の中には改めてわが憂鬱に悩んでいる方が少なくない。もちろんOBとて大差なことも言えないが……。パーティーや結婚式などの受付で冷や汗流して署名しているご仁をよくお見受けする。

サラリーマンばかりではない。ここへ来て近ごろはやりのカルチャーセンターのペン習字や書道の教室にもご婦人たちが押し寄せているとか。PTAや地域活動が盛んになるにつれ人前で字を書くチャンスがふえているかららしい。いずこを見回しても、東と時代を問わず"名筆"願望は万人共通の願いなのだろう。

だがわが字の上手下手を気にしすぎたり、お手本通りだけではいつまでたっても字は上達しない。むしろどうしたしがらみを断ち切って自由、闊達（かったつ）に書くこと、つまり"自分に立つ"ことが出来た時に、書き手の面目躍如とした人の胸を打つ字になる――と池田先生はいうのである。

もちろんそうなるためにはふだんから書に親しみ、習字に励むことが大切なのだろう。

が、さしあたって新入社員諸氏はビジネス文書に習字、脱字は タブーだし、だれにでも読みやすい字を書くことが基本だ。なお選挙の投票にも"候補者のだれかを確認しがたい"記名が十五万票以上（昭和五十二年参院選全国区）もあったとか。もったいない話である。

いいものを読んだ。よしっ、この心意気でやろう！。うまく"立つ"ことは出来なくも、努力することはできるのだ。

日本経済新聞 55・5・19

お振込は千葉銀行012―54253
谷津干潟愛護研究会

日本狩猟協会「狩猟」第一巻第二号 10月

たまには、山里といいなあ

写真は、「台倉」という所で、房総半島のほぼ中央にある。鹿野山のうら側にあたり、南西方面に九十九谷を見かえている。

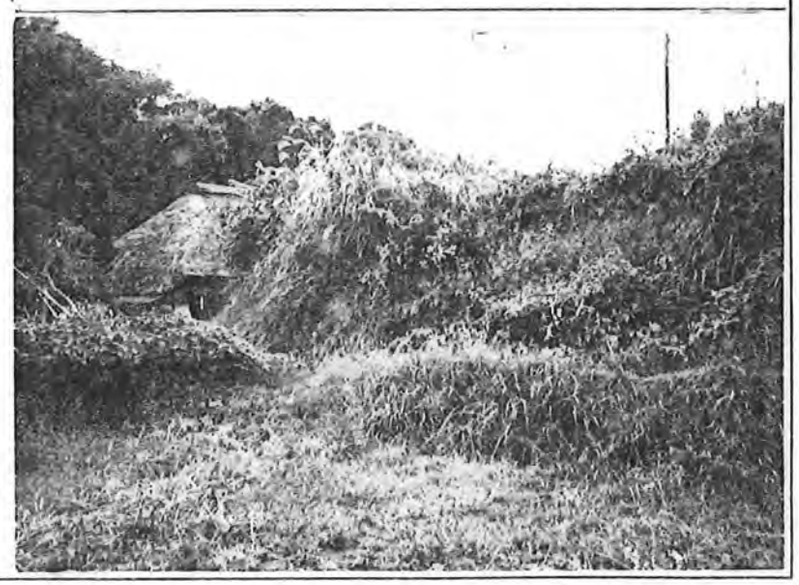
このところ、全く行っていない。いつも、干潟のことばかりかかりっきりでいる。それでも、コオロギやモズの声を聞く頃になると、ふと、田園地帯や山里に想いが走る時がある。

私はここの団体の会員でもある。4年前、松葉杖をつきながら、ギプスのまま登ったことがある。丁度うまい具合に、庭の瓦みに野性のサルの群が来たので、よく見ることが出来た。

わらぶき家のすぐそばに立っている、野生の夏ミカンを食べに来たのであった。

房総自然博物館とは、写真③のわらぶき家である。以前、ここに農家の人が生活していたのだが、子供たちは皆、農業をきらって会社勤めに行ってしまい、後つぎを出ず、老夫婦ではどうしようもないので里へ下りてしまった。その後を、このグループが、土地と家を借りて、自分たちで農作業をしている。

1) 南面にある山。野生のサルがすむ。
2) すむ人もいない、わらぶき屋。
3) 見える家が、房総自然博物館。



(3

1)

2)

＝ふかんど＝

狩猟とは直接かゝわりのない話ですが、首都圏の直ぐ近く千葉県習志野市谷津には（総面積約50ha）東京湾岸に残されたただ一つの自然干潟で有名な野鳥の生息地があります（35種約一万羽が四季シーズンに羽を休める絶好の鳥の楽園です）ところが、この干潟に建築の廃材や商品クズなどを不法投棄する不心得者が続出　この干潟の自然を守り〝自然観察教育園〟にと孤軍奮闘、鳥の写真をとりつゞけ、僅かな主婦の方々と干潟の清掃作業に取り組んでいる谷津干潟愛護研究会の森田会長にお会いしお話をお聞きしました。

干潟に隣接する谷津遊園地が建設省と関係の深い日本住公に買収されたので、埋立てないという保証はなく、子供たちのための野鳥観察教育園の夢も、消滅するのではないかと苦慮されています。立場は異なりますが、開拓が進展することで、また乱獲することで狩猟にゲームが見られなくなった時の寂寞たる猟人の味気なさをフト想い、森田氏の＝ふかんど＝同氏発刊のガリ版刷りレポートの中から一部を御紹介しました　頓田　弘

55年.8月 船橋高校生物クラブ（京葉港）

人木登りしている時も、その木の性質を体験に知っていて、それを考えて延んでいた。〉

ふかんど

第104号
1981.10.28
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五ノ六
電話(0473)一三六一六六六八
文責 森田三郎
会費年2000
創刊 1980.6.3

失なわれてゆくもの

昭和54夏、京葉港において、コアジサシが唯一つ営巣した。くすしくもそこは、セイタカシギが卵を抱えていた、その池のそばであった。

コロニーは、前年の、昭和53年には、もう再び見ることはなかった。

55年、とうく一つも営巣しなかった。

56年、ほんのいくつか営巣した。だがそこは、すぐにでも建物が出来るように整地された、残土の上だった。支却済みの、鉄条網が張りめぐらされ、〇〇用地と書かれた看板が何本も立っている所。そして現在、工事が進んでいる。

全国最大規模を誇った、あの巨大な繁殖の海原如きコロニーは、この京葉港埋め立て地において、そこに咲いた、自然破壊と開発のハザマ、アダ花だったのだろう。

私はそこで、すべてのものを見て来た。多くの人をここで、それを見て来た。私が、最も多くのものを見、そして接して来たと思う。少なくとも、その中の一人である。

ひとかけらの〝面影〟と、記録しか残せなかったということは、今なお誠に淋しい限りであるが、やはり事実なのである。せめて出来ることと言えば、「生き証人」、それを不完全な欠点だらけの、カタワみたいたものになれるくらいだろう。それでも、ならないよりはましであろうと信ずる。

私の歩いて来た、東京湾興部、葛西・浦安・京葉港・幕張の埋め立て地における記録は、殆んど個人〳〵の努力によってなされて来た。

この人達は、皆、その立場や職業こそ違えども、埋め立て地に関心を持っている。

首都圏のすぐ足もとにあり、時間的にも至近な、多くの自然保護関係者がいるのであれば、団体の力や大針によってなされるのが最もふさわしかったと思う。

私と共に、仕事の合間をぬって、記録写真をとってきた人達、皆現地で知り合った。この人達がいたという事は、幸せだったと思う・・・・。

好評です習志野市文化祭

5年程まえから、文化祭ではこういう行事をやって来ました。その頃から比べると、市民の方々は、はるかに深い関心を示しております。来た人から、何度もいろいろなことを聞かれました。

以前は、こういうものをやりましても、何か、「一歩キョリを置く」といった、そんな感じ方でした。しかし今は、「何か身近かもの」に接しようという、そういう態度なのです。つまり、ごく自然にそういう感じ方になっている、そんな感じの言葉が聞かれるのです。

考えてみれば、おかしなもんです。5年まえよりも、埋め立て地と開発が進み、渡り鳥の卵をつくる所もはるかに少なくなり、干潟の周囲もだいぶ都市化しているのです。

袖ケ浦公民館ではいくつもの行事がなされ、いろんなサークルが出品しています。職員の話では、いわゆる一番「うけ」がいいそうです。干潟の想い出の絵や、会報「ふかんど」を、皆さんよく買って持っていかれます。

地区のある役をしている人の話では、圧倒的多数が干潟の保存を希望しているとの事。

去年度市民文化祭へ参加ありがとう存じました。
厚くお礼を申し上げます。

文化協会　金子定雄

すばらしい展示でした。
熱意が伝わってきます。
今後とも　干潟を守り続けて下さい。

遠くから夏休みに来た孫をつれ。ハイキングにも友達のって干潟を見て鳥の遊ぶ様子など興味深く観察して居りましたのに・・・
是非この干潟を残してほしいと思います。
お願い申し上げます。名の知られた谷津の自然を環境をこわさないで下さい。子孫のためにも・・・

森田さんへ
すばらしい展示ですね。　写真もとても良いと思います。
このようにして　今、自分達の住んでいる所のことを再発見できる
本当にうれしいことです。
一人でも多くの人に　知ってもらい、自然を大切にしてゆき、子孫にのこしてゆきたいと思います。
これからも　がんばって下さい。

宮川郁子　1/28

ふかんど
第105号
1981.10.28
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二―三五―六
電話(〇四七三)―二六―六六六八
文責 森田三郎
会費年2000
創刊 1980.6.3

会報を作ってみて

谷津干潟保存運動に関わって以来、過去七年間、私の体験から見れば、楽なことだと思っている。正直言って、考えていたよりも、はるかにやりやすいし、楽である。

なぜもっと早くから作り、決心しなかったのか残念に思うし、今から見れば、不思議な気持もしている。

現在、次々と拾い上げてるようなところだが、もしその時にやっておれば、もっとましな内容に出来たかも知れない。かなりのものが、埋もれてしまったかも知れない。

会報づくりは、うちの中で出来る。必要なものは全部、道具がカバンの中に入ってしまう。どこへでも持ち歩ける。どこででも書けるし、作れるし、そして考えることが出来るのだ。トイレや人ごみの中、いかなる時や所でも、「頭の中で会報が作れるしなんて、とても便利だ。まさか、頭を私の体から別々にしたり、そこいらに置き忘れるということはあるまい。だから、頭こそ、会報を持ち運ぶ"カバン"であり、会報を"作り出すモノ"なのだ。最後必要限度、この頭があればよい。私から、頭をとることは、誰も出来やしない。

会報といっても、B4判のわずか2枚だけだから、とても小さなものだ。それに、書くものは全部手で書くから、その量は少しかない。活字にすれば、もっと読みやすくなるし、たくさんの事がのせられる。だけど、それにはお金がかかる。やって出来ないわけではないが、お金のことを考えたら、今度は回数が出せない。

皆さん、先はどうなるかわかりませんが、今はこれでがマンして下さい。字も、もっとうまくなろうと、いつも思いつつ、これでも努力しているのです。

私は今、仕事をしていません。7月の末、14年間働いた新聞店をやめたのです。でも、わずかながら貯金もあるし、失業保険もある。だから少時くは時間がとれました。だからこの機会にと、「ふかんど」をいっぱい出しました。

谷津干潟の近くに、住む所をさがしています。もうじき決まります。そして仕事をします。そんな不安定の中で会報を作っています。

ぎやっていました。〉

ハフアミリMから14号線の方に行くと、船溜まりがあり、堤防がある。そこに昔納涼台があって、大変に

あそび格言

名人に定跡なし

名人・上手といわれる人が、時として、素人の指すような手を指すことがある。それで負けてしまうのかというと、そうでもない。その一手が勝因となって勝つ場合がよくある。われわれヘボが一生懸命定跡を覚えて、その通り指していても、そこに書いていない手を指されてコロリと負けることがある。

こういう時、一体、将棋(囲碁)って何だろうと思う。定跡を一つでも多く覚えて強くなろうという固い決心がゆらぐのだ。しかし考えてみれば、勝負事とは、そういうものなのだ。奥深いのである。

とすると、「名人に定跡なし」とはよくいったものである。本に書いてある定跡を覚えたくらいでは、とても名人・上手にはなれない。どこかで定跡をはずれて、初めて勝負の奥義に触れることが出来るのだ。

しかしまあ、とかく「一例」といわれているものには、どこか常識はずれのところがあるものだ。普通では食べられないような奇妙なものが、珍味と称され超一流の料理となっている。一歩、美術館へ足を運ぶと、原型をとどめないほどにデフォルメされた超一流の彫刻作品が並べられている。しかし、忘れてならないのは、デフォルメの前にはきちんとした基礎があるということだ。名人と迷人の違いは正にここにある。

これが、寄席となると話は全く別だ。名人には上席があって、迷人に上席なしということになる。

(ヘボ)

(出所不明)

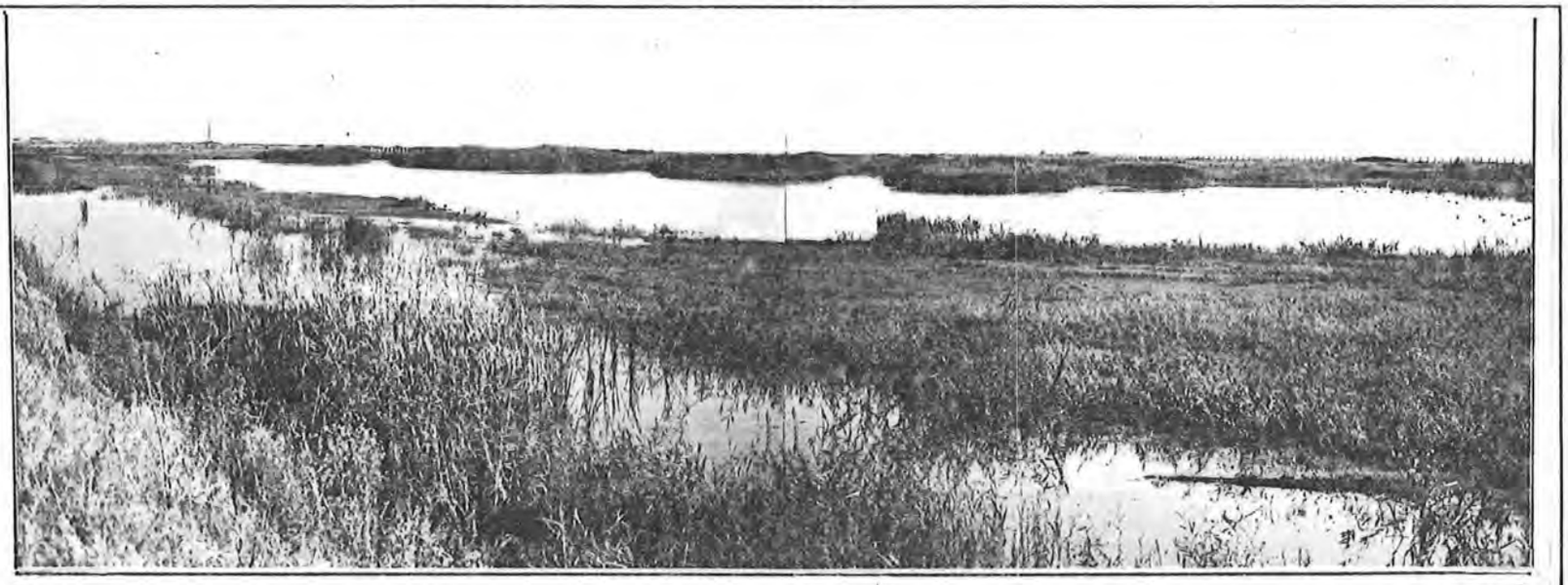
埋め立て地の水溜まり

埋め立てをした後には、大小の水溜まりがあちこちに出来る。写真は、51年に埋め立てが完了した所である。

今までに、私が見て来たうちで、一番きれいで、環境もよく、印象に残っているのは京葉港地区にあったものである。あたかもそれは、広々として水々しく、水辺の草が青々として、大小の水溜まりからなる〝湖水地方〟と私が言っていたもの。50年頃に作った埋め立て地の地図や、私の日記に何度もその言葉が使われていたほどである。

今はすべて消えてしまったけれども、船橋卸田地一帯を中心に、習志野トラックセンター、ホンダのカープール一帯、さらにそこから菊田川河口にかけての広い所がそうだった。来た人は誰でも、皆気に入ってしまうのであった。鳥に殆んど関心のない人でも、その辺一帯の感じ、地理環境から受けるムードが好きであった。

いろいろな形の水溜まりがあり、草原、ガマの群生、ヨシ野、コロニーもあった。そしてそれらが、入り乱れて点在していた。それぞれの環境の違いによって、それぞれの渡り鳥がエサをついばみ、巣を作り、泳ぎ、水浴びをし、羽根を休めてまどろんでいた。私はここで、赤トンボの大編隊を見た。澄みきった秋空の下を、見わたす限りまで広がり、流れる如く陸の方へ向うのを。



埋め立て地の水溜まりでは、現在あるもののうち、最も理想に近いもの。習志野市の境とはすぐの幕張C地区。右手の向うは人工海浜。左手の向うは、千葉市の磯辺である。

埋め立て地の殆んどは、写真のように鉄条網が張ってある。ゴミがひどいからである。

ふかんど

第106号

1981.10.29

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話 〇四七三—三八—六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

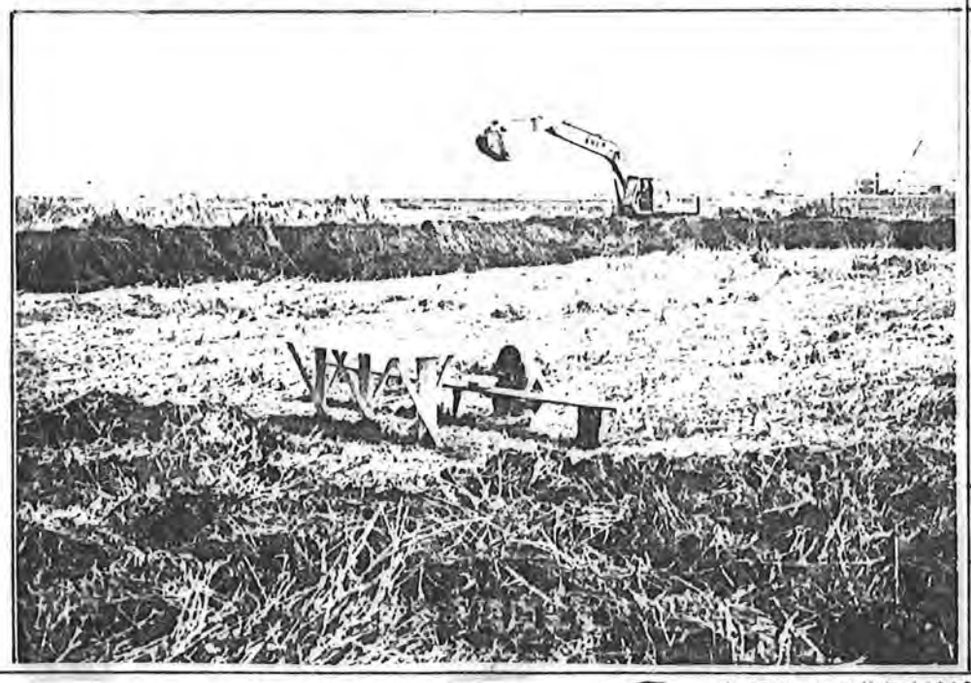
〈京成サンコーポの横に、今はドブ川になっているが、昔、小さい頃、ハヤの群が泳いでいたのだ。〉

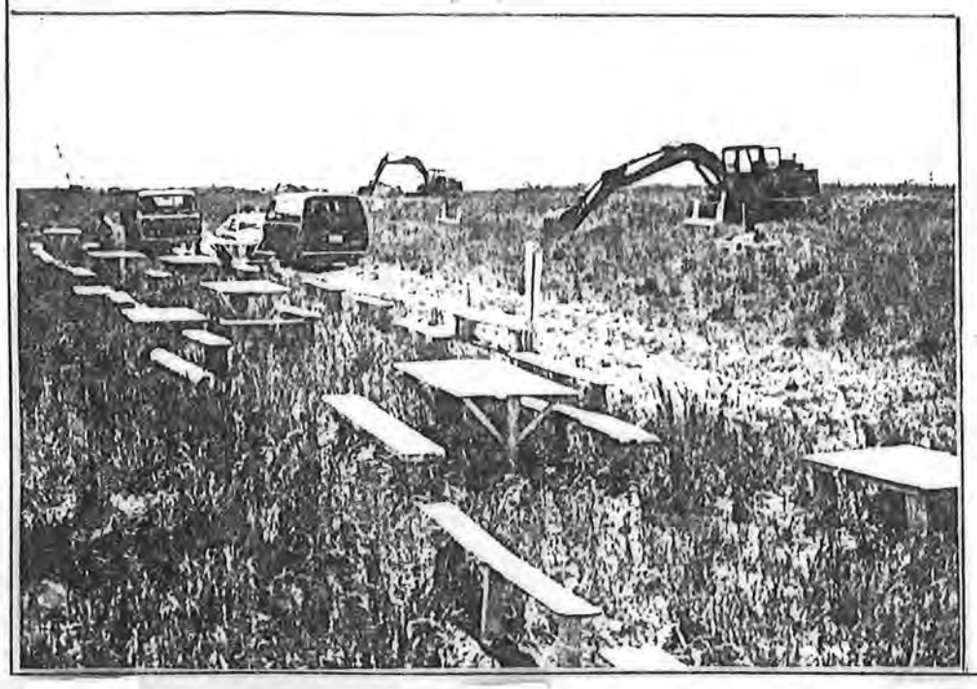
自然緑地の為に

写真は、54年3月のものである。この頃が、テーブルとベンチをめぐって、対企業方との関係が最も険悪になり、激しかった時である。勿論目的は、テーブルとベンチをテコにした、自然緑地の獲得であった。

同じ所で、工事とテーブルとベンチの作成が行なわれていた。双方が"競合"していたのだ。まわりでは、パワーショベル、ブルドーザー、ダンプカーがうなりを上げていた。

この時、唯一人、私と共にテーブルとベンチを作ったり、ペンキを塗ってくれた人がいる。北九州市から来た、亀田新悟さんであった。地元の、事の次第を知っていて、見ていた自然保護団体の人は何百人といだ。が、何一つとして具体的なことはしなかったのである。何の為にテーブルとベンチをつくるのかということは、何十回も説明ずみであったし、納得していたし、自分達とそのテーブルとベンチを観察会で使っていた。拱手傍観を絵に画いた如きであった。言葉は悪いが、デクの坊とはまさに、このことだろう。しかし、亀田氏は、そんなことは何も知らずに、ただ私を助けてくれたのである。右下の写真と、左下の写真の右がわのパワーショベルの手前でペンキを塗っているのが氏である。顔見知りの人もたくさん、観察に来ていたが、見て、そばを通るだけであった。私も、"ある覚悟"をもって行動していた時。





亀田氏一人でも、私にはとても心強かったのである。工事関係者が15人くらい、私を囲んで詰めよっていた。

お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

自然緑地の草

谷津干潟の自然緑地では、草同士がすごい陣地争奪戦をやっております。初めは、塩気に強かった植物が多かった。しかし、年々、土地の性質が変るにつれて、内陸性の植物が圧倒してきました。左の草などは、年々少なくなっている。

髪のもみたいな草です。セッカが好んで巣を作る。砂がとぶので、この草の種がまかれた。

タンポポ。春だけかと思っていたら、秋にも咲くんですね。

セイタカアワダチ草の黄色い花が満開である。とってもきれいで、いかにも秋らしい。

谷津干潟で潮干狩が

写真は、52年である。5月。谷津干潟が立ち直りつつある時だった。

交通事故を起こす直前に撮影したものである。ひとたび、貝類が発生すると、いつの間にか口コミで伝わり、このような光景が見られるようになった。が、これらの人は、谷津干潟を"利用"はするが、決して自ら、保護をしようとはしない人達である。ここで、私がはっきり言っておきたいことは、地元自然保護団体のように、利用する権利を主張して、それをカバーしないのは、やがて破壊につながるのである。

ふかんど

第107号

1981.10.30

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五ノ六
電話(0473)二二ノ六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

〈しからみて裸足で家をすっとび出した。波の音のチドリの声の夜のうみ。いさり火が涙でにじんでいた。〉

我がフィールドワークの知られざる側面・・・

「いそしぎ」にて

船橋市高瀬町、「船橋卸団地」の中に、「いそしぎ」という喫茶店がある。ご飯を食べさせてくれる。

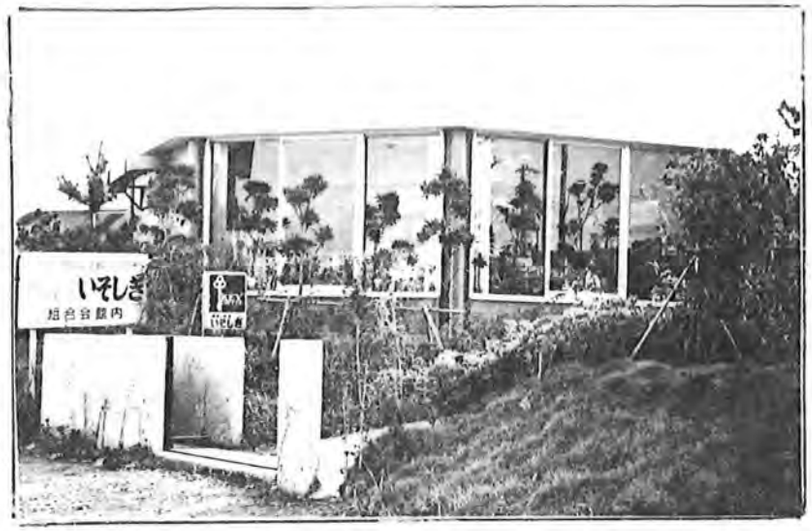
写真①の所がそうだ。外から見ると、ガラス張りだから、何かの展望台のようだ。いそしぎ、という名前は、谷津干潟の近くだから、それに因んでつけたと、ここの経営者である松永さんは言う。へえー、うれしいじゃないか。

「いそしぎ」には、いろんな人が来る。卸団地関係の人、埋め立て地の工事関係者、商工会ぎ所、市や県の人が来る。それに釣り人や、私のように谷津干潟で何かをしている者もである。現在、来来迄は建設時代なので、工事関係者はここ当分多数見るだろう。そして、埋め立て地に順次企業が進出してくるにつれ、会社や商用関係者が他を圧倒するようになろう。

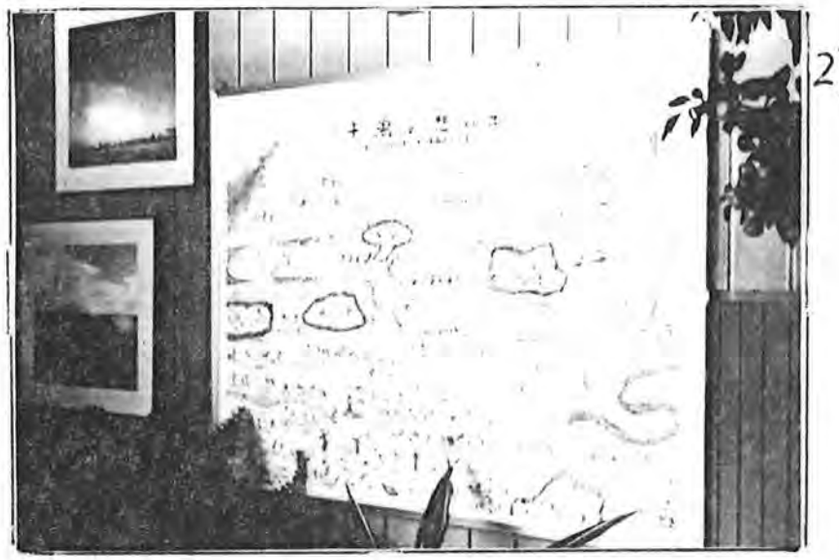
私は毎日の如く「いそしぎ」に行く。自分でも手に負えない、まじめさや、イッコクさが、こういうところにも出ている。私にとっては、干潟や広い埋め立て地におけるフィールドワークの〝オアシス〟だ。ここに入れば、身を突き刺すような寒さや、夏の何もかもうだるような暑さ、雨や風の日、砂やホコリの舞い上がる日にも、この身をさらさないで難を避けられる。

中には、渡り鳥のパネルや、干潟の想い出の絵が飾ってある。経営者の松永さん(主婦)は、教養のある人だ。私の如き〝ガサツ〟な人間とは、人種が違う。面立ちから察すれば、美人だったと思う(否、今もです)。

私はここで、休んだり考えたりする。生活と運動の中で、「ある場所」を占める所だ。



1)


2)

3)

お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

谷津干潟のゴミ

ゴミはゴミでも、流れるもの。すなわち風や潮で移動するゴミだ。

私たちが、谷津干潟のゴミとつき合い始めてからもう、三年以上になる。そのおかげで、ゴミのことについては、ある程度のことは知った。

大きく分けると、二つの例を上げられる。一つは、「ゴミの流れるようす、つまり、移動の仕方」。もう一つは、「どんなやり方でそうじすればよいか」ということである。

- 移動の仕方

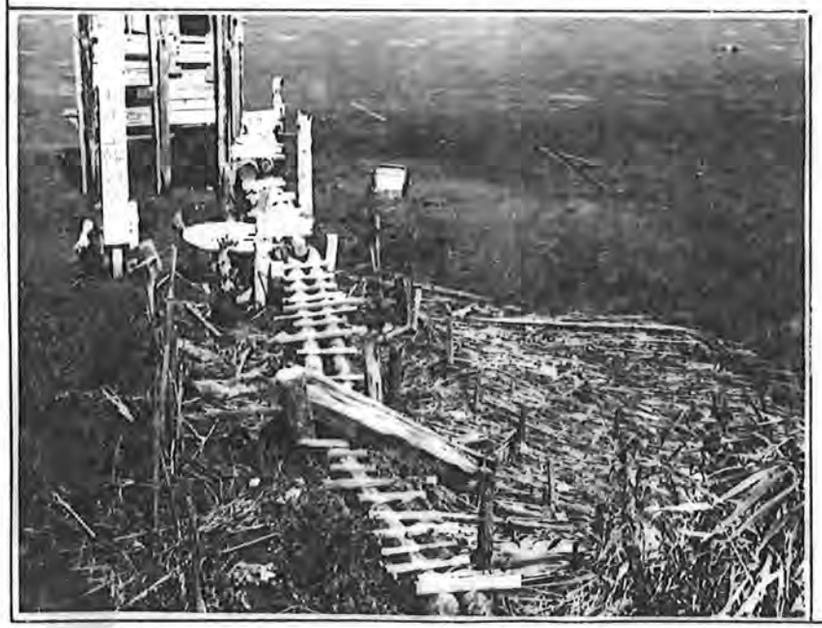
ゴミは、風と潮の流れによって動く。谷津干潟は東西に長いせいか、南と北がわにゴミが流れついて、西と東がわには殆んど流れつかない。そして、冬は埋め立て地がわに。夏は北がわ、すなわち街がわの方に多い。理由は簡単だ。冬は北風が吹くし、夏は南風が吹くからである。だから、そうじをする時は、冬は埋め立て地がわに、夏は街がわに力を入れてやればよいと思う。

- そうじのやり方

人手と時間とお金がたんとあれば、全域をまんべんなくやるのが一番いい。しかし、何とかとがお話しにならないくらい足らない現状では、とてもじゃないけど、そんなこと出来やしない。何しろ、「やる人間」が、あまりにも少なすぎるのである。会員の数が何百人にいる自然保護団体がいくつもある。が、それが、クリーン作戦に参加している主婦の、そのたった一人分すらやれないのだから。おまけに、やっている人間を、やらない人間が批判したり、ひどい時は〝敵視〟するしたものであった。まあ、そんな事はいいや。

それで、そんな中で、私達はどんな方法でそうじしたかというと、四ケ所か五ケ所のポイントを決めてやった。そうすれば、ゴミは動くのだから、何回も長い間やってると、干潟全体がだんくときれいになってゆくのだ。

谷津干潟の中でも、ゴミが集まりやすい所と、そうでない所がある。大体、くぼんだ所や、ヨシなどの草が生えている所に集まりやすい。流れついて、ひっかかりやすい所だ。そこに重点をおけばよいのだ。



ふかんど

第108号

1980.10.31

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四七二—二六—六六六八
文責 森田三郎

会費 年2000

創刊 1980.6.3

八木の枝をたくさん束ねて、たくあん石のような、しばらくーてそれを上げると、イカがとれた。〉
ものにくくりつけて、うみの中に沈めておく。

失なわれたもの

干潟のこと、埋め立て地のこと、それを私は、後世に伝えたい。残したい。

そこが、どんな所だったのか、どのようなことがあったのか、その時代に生きた者として、ある義務の感覚を信ずる。それを知り、そこに居合わせたる私達は、為す者である。そして、それを評価し、判断するは、すべて、後に来る者にある。

今、現に、目の前でくりひろげられているもの、私達の為っていることが、何であり、どんな価値があるのか、この場この時において、いかに判断し得えようか?。たとえ、その力微弱なりとも、足らざるところや、心に不安あまたあろうとも、ただ〝為すべき一事〟を以って、私達が能うるところ。

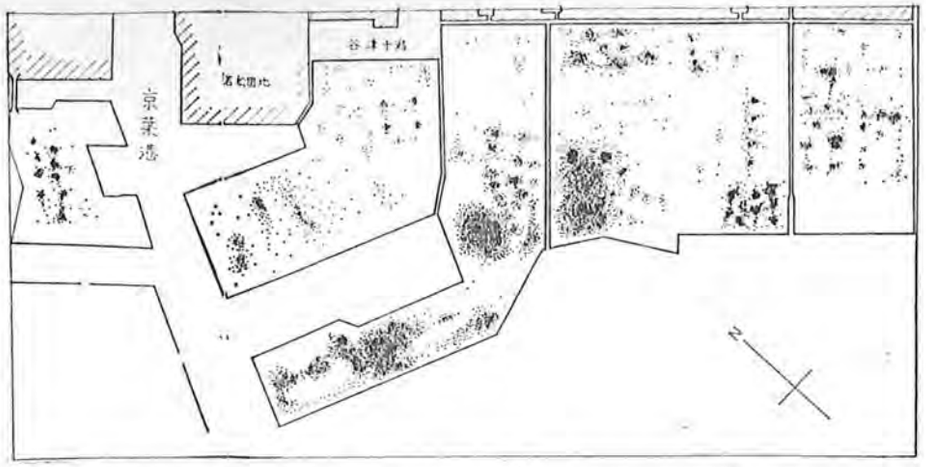


図2 京葉港・谷津地区におけるシロチドリ・コチドリ・コアジサシの繁殖個所（1点が1巣を示す）

繁殖地図

上の分布図は、私が昭和51年、4月15日より8月20日まで調査したもの。どんな所にも足を入れて見て歩いた。かなりの精確さを持っていると思う。

卵から出たばかりの、コアジサシのヒナである。これが巣で、一つの点で表わしている。

写真の、コアジサシの卵より出でたるところ。

判断や意見や方針、主義主張にあらざるして、ただこれ〝事実〟のみとする。このコアジサシと卵のある所、判断や意見などの中でなく、私達の頭の中や舌の先、話し合いの机の上にでもなく、ただ埋め立て地のそこの所、その時にあるもの。

消え去った京葉港埋め立て地の、コアジサシの卵とヒナの事実から、人それぞれに、それぞれの立場から、幾多の意見や判断が出るもの。しかし、それらの意見や判断、主義主張を、いくら積んで集めたとて、たった一つのコアジサシの卵とヒナなる事実を生じさせるものでも、残せるものでもない。自然保護の人は、教訓くと言うも、生かさなければ生きず、役に立てなければ、役に立たないのである。

お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

草むらのかげで

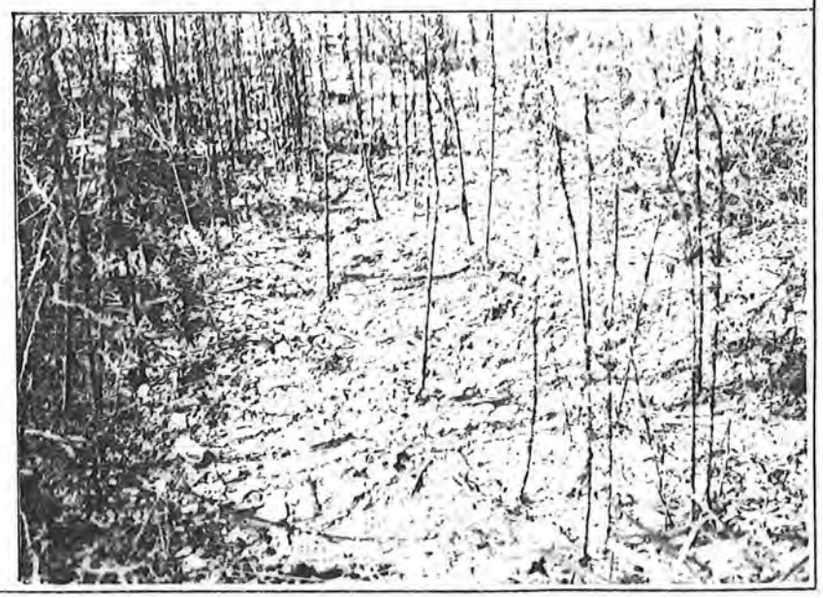
撮影 1981.10.20.

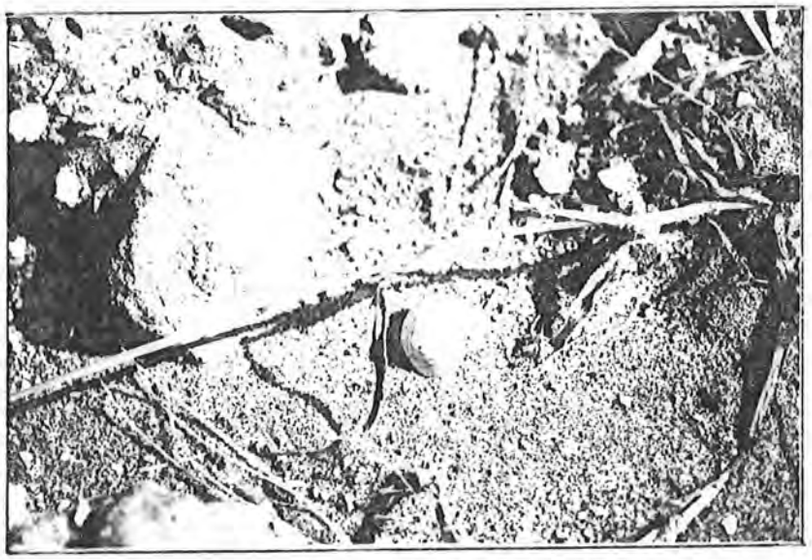
夏の間、生い茂れる草の下にかくれていた貝がラが、草が枯れ始め、葉が少なくなると、だんくと目につくようになってきました。

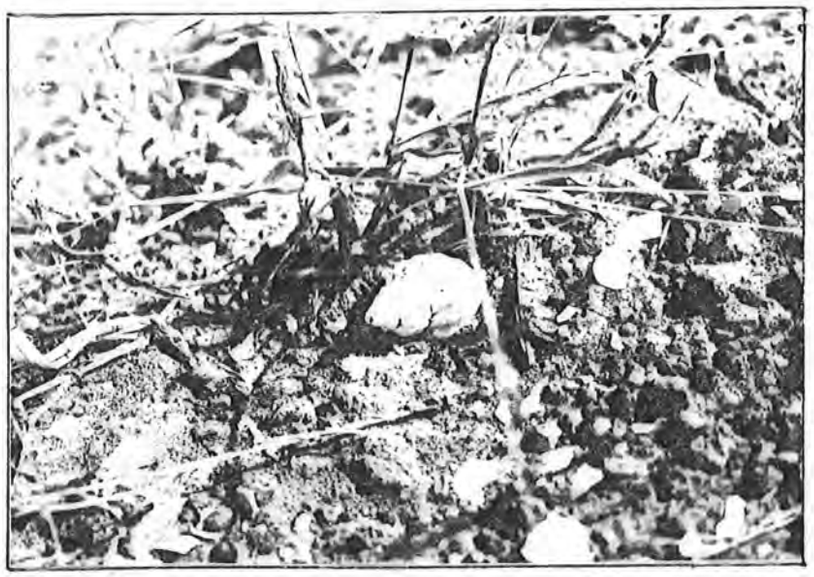
それは、ここがやはり、埋め立て地であったことを表わす、一つの名残りなのでしょう。でと年々、見える貝の数や貝の色、そして砂の色も、海のものだったという感じを少なしていっています。貝の色は、その白さが、くすんだシヤのない白さに変っていくのです。砂の色も、それがどんな色の砂であってもと、やはり、シヤヤまぶーさ、又、かって白っぽかったものが、黒ずんだ色や、茶色味を帯びてくるのです。

植物も、塩性のものは強んで姿を消しました。草といい、地面といい、埋め立て地という印象はもちろん、〝海の面影〟を思わせるものは、次々と少なくなっていってます。

これからも、埋め立て地が徐々に変ってゆくありさまを、カメラでとらえていきたいと思います。来年は試しに、何か植えてみようかしらの。







ふかんど

第109号

1981.11.1

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話(0473)一三一一六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

〈土手みちは、夕方になると、最初に蚊が出た。次にヤニラ。次にコオモリだ。そして、暗くなっていくのでした。〉

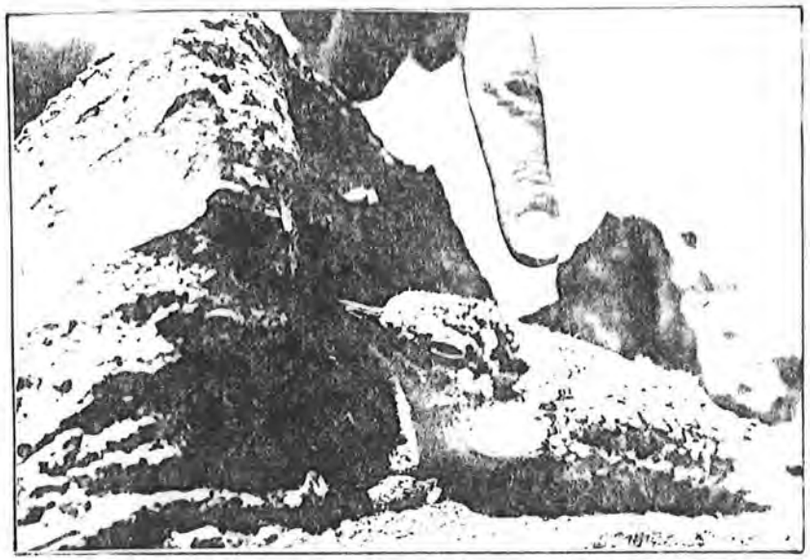
失なわれた光景

昭和50〜52年頃、京葉港埋め立て地では、写真のような光景が、何千と見られました。コアジサシ、シロチドリ、コチドリの、日本最大のコロニー（集団営巣地）が形成されました。

4月中頃から、8月の上旬にかけて、京葉港は、いたる所に渡り鳥の巣がありました。

しかし、ある程度明らかにされたのは、私が調査した、貝がらと砂の所に巣をつくる、コアジサシ、シロチドリ、コチドリだけです。その他の、草地や水辺、ヨシ野の中に巣をつくる、ヒバリ、セッカ、オオヨシキリ、カルガモ、バン、カイツブリ、ウズラなどについては、殆んど調査されなかったのです。そして、渡り鳥のすみかが消滅していき、その数が減っていき、鳥を見る人の数や団体の会員数が増えるにつれて、マナーを年々低下していくのは何故か？。誰でも自由に使える為にと作られた記録が、一部の人間の感情的対立や、権利意識、主導権の力く執などによって、所有権を主張するかの如き言動によって、使用が制限されてしまいました。

しかし、幸いなことに、埋め立て地における記録の大部分は、団体間の争いから全く自由な、個人く有志によって友さん、残っています。



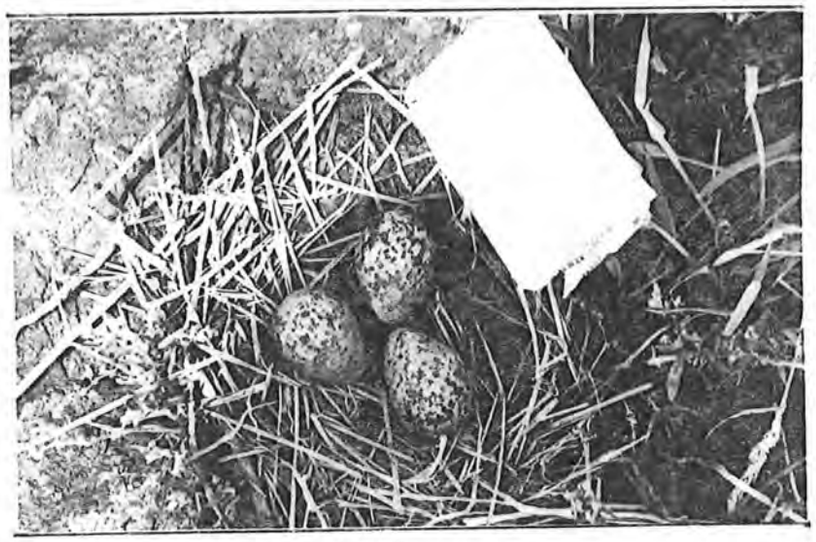
上は、土くれの陰にかくれているコアジサシのヒナ。下は、オスとメスの交尾する所。

撮影・提供 藤富敦郎氏（アニマより）

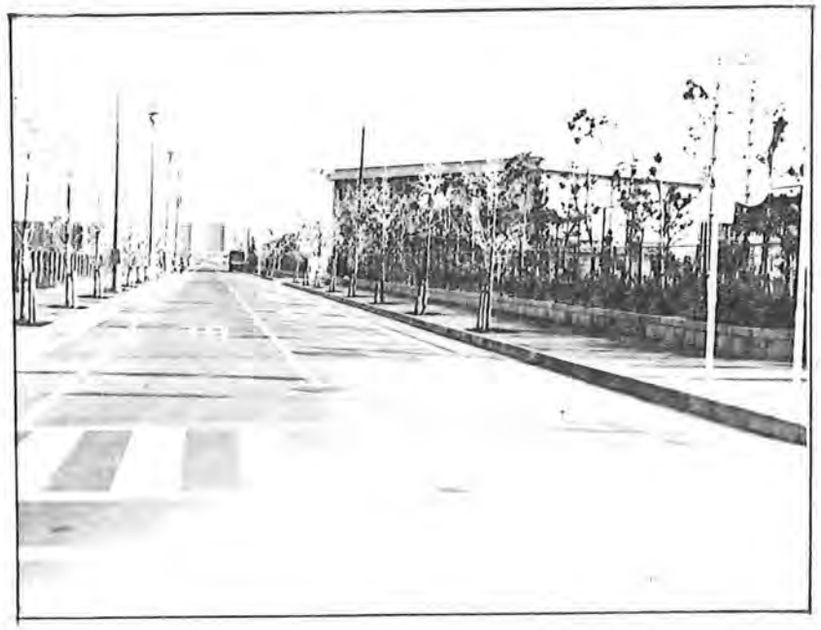
お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

あのセイタカシギの巣の所は今・・・（幕張）

1)



2)



3)

今は学生服の生徒が

「ねえ、皆んなあ、三時限目の体育の授業はねえ、フォークダンスなんだってえっ！」。「あーらっ、そう、今度の先生なかなかやるんじゃあ？」。「あの体でえ、ダンスやんのかしらねえ？、ウフフーー」。

あれから二年。ととのセイタカシギの巣の所に立った私の耳に、そんなセーラー服の女生徒達の声が聞えてきた。

私は、調査の途中、フト立ち寄ってみたくてここに来た。つい さっきまで、砂と貝ガラの砂漠のような所から、〝何の気なしに〟そこを、見たかったのである。真夏の、やけた砂とホコリの、うだるような暑い日だった。麦わら帽子と半ズボンに切ったタイツと、砂とドロのついたシューズ。正門から入って、水道の所へ行き。顔や手足を洗い、頭を洗い、歯をみがいた。スッキりした気分になって、今度は改めて、ゆっくりと思い直すようにして「辺り」を見まわした。

スノコの渡り廊下を、生徒たちが列になって、話しながら、笑いながら歩いていく。「ファイトォ――」と、体操着姿の一団が私のそばをかけていった。体育館の中で、バレーボールがバスケットボールをやっているのだろうか、「エイッ」とか、「オォーッ」なんてかけ声が聞えてくる。

「ここだったなあ――」、そして私は、「巣の所」に立った。間違いはなかった。時たま来ていたから。正門の下だった。

本を片手に抱えた先生らしき人が校舎から出て来た。私をちょっと見て、スリッパをパタくさせて足早に歩いて行った。「帰ろうかーーーもう――」。私は、埋め立て地のやけた砂のデコボコ道を、コロニーに向った。

---

①は、卵を抱いている時。そこに新たに道路が作られてゆく。巣は左手矢印

②は、卵。ブルドーザーが走るとゆれていた。

③は、現在のもの。幕張高校田地。

ふかんど
第110号
1981.11.2

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〇三五〜六
電話(0473)二一六六六八
文責　森田三郎

会費年2000
創刊 1980.6.3

〈海草がたまっていれば、必ずその中に魚がいた。そういう所を見つけると、すぐさま手でかき分けるのが常だった。〉

簀立て

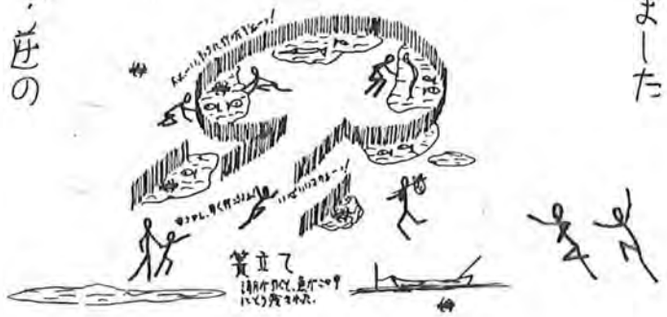
干潟の中に、「よしずい」を立てておいたものです。ヨシをへいのようにして、囲みを作りました。入口から入ってきた魚は、ヨシのために逃げられなくなってしまうのです。入口のまわりにも、出来るだけ入口の方に魚が氷いで集って来やすいように、つい立てのようにヨシを立ててありました。

私が覚えているものでは、今の、「習志野トラシクセンター」の所のものが最後までありました。

簀立てでとれる魚は、当時、その辺にすんでいた魚の大部分がとれました。ウナギや渡りガニもとれました。

簀立ての入口は、海の方ではなく、陸の方にありました。どうしてかというと、魚は、満ち潮と共に潮の流れにのって氷いで来ます。そして今度は、引き潮になった時も、潮の流れにのって、沖の方へ氷いで帰って行こうとするからです。

入口から、「よしず」の囲いの中に入ってしまった魚は、潮が引いていく沖の方へ氷いでいこうとするのですが、「よしず」がある為、そこでつっかえてしまうわけです。出ようとぐずぐずして、あちこち氷ぐのでしょうが、そのうち、潮がすっかり引いて水がなくなってしまいます。つまり、「行きはよいよい、帰りはこわいこわい」という、そんなわけです。



潮が引いた後に行ってみると、魚たちは、干潟の地面の上や、たまった海草の中、あるいは浅い水の中にいるので、どんな人にも網やチでつかまえられるのでした。

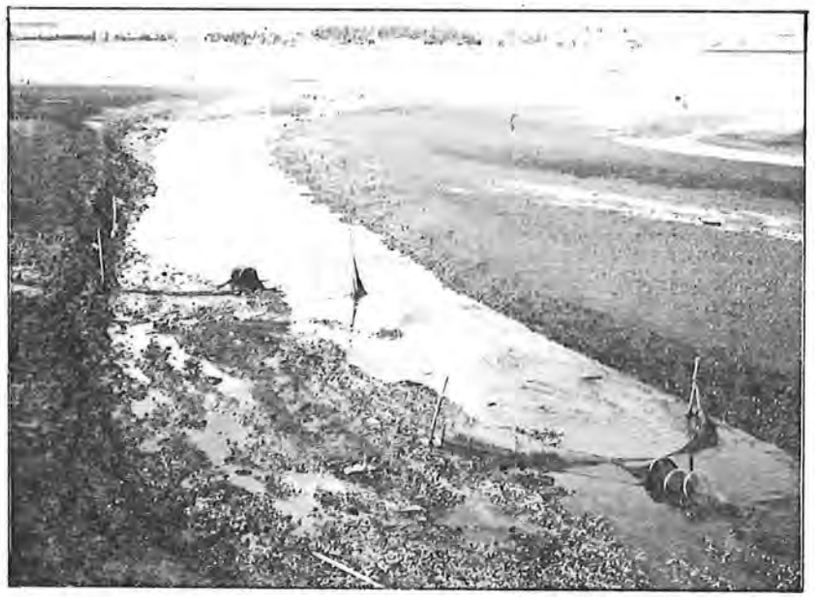
とくに、たまった海草の中には、たくさんの魚やカニがじっとしているのでした。ぼく達子供は、いろんな種類の海草が集ってたまっている中から、きつい海草の匂いをかぎながら、手でやたらとかき分けてつかまえるのが大好きでした。ぼく達は、海草の上で寝っころがったり、デングリ返しをやったり、山のように積んでもぐったりしながら遊んでいました。又、海草をいっぱい抱えてはぶっつけ合ったり、空に向って投げたりしてはしゃぎまわっていました。

その頃、「簀立て」という名前は知りませんでした。本当は、これは、船にのって来た人達が、お金を払ってやるものでしたが、ぼく達はお金を払ったことがありませんでした。誰にもいけないと言われなかったし、だいいち、その頃、お金を持って海に行くなんてことは、考えたこともありませんでした。魚の入れ物もなかったので、皆んな逃がしました。

こうやって魚をガッポリ

何しろ干潟は、そこいらじゅう魚だらけなんですよ。メチャクチャにいるんです。どうこの時分になると、魚をだいぶ大きくなっています。そんなとんだから、釣り針のでっかいヤツを、エサをつけないで、大人も小供をひっかけているのです。波を立てて氷ぎまわっている群の中へ、重りをつけた針を投げ入れ、〝グイッ、グイッ〟と、あちこちでやっています。

群は、満ち潮と共に、流れにのって干潟の中へ入って来ています。そして、引き潮と共に、又出ていくのです。潮は、干潟の中に出来ているミオ（小川みたいなもの）を中心に、出たり入ったりして流れるわけです。当然魚も、そのミオに集まりやすく、一番多くいます。又ミオは、最初に潮が入って来て、最後まで潮が残っているので、魚の最も適した、いわば「通りみち」でもあるわけ。そこに網を張るんですからねえ。



〝そういう人間〟になれ

— 私の体験から —

子供は、大人の、その後姿を見てたきくなってゆく。生きている姿が、子供にとってはそっくりそのまま〝教科書〟なのだ。それに対して、あぁやれとか、こうやれとかいった「教える」ことは、殆んど無力である。

それには、まず大人が、子供のことを言う我々大人が、情操豊かで、健康で、温かい思いやりのある、生命力のある、想像・創造のある人間になっているか。体ごとぶつかっているだろうか。子供にとっては、「大人と自然の一部」なのである。

子供に自然との接触を

「こどもの日」を中心に、連休を利用して子供連れで、遊園地や動物園などへ出かける家族が多い。手軽なレジャーということもあるが、少しでも子供たちを自然の中に解放してやりたいという親の願いが感じられる。

事実、子供たちが解放感にひたるひと時を持つことは、成長に欠かせない。年々、子供たちは、自然の中で思い切り遊ぶことができなくなってきているからだ。

農村地帯でも、農業の機械化が進み、子供たちは農繁期などに手伝うこともなくなった。同時に牛や馬も姿を消して、自然界の営みを直接肌で感ずる機会もなくなってしまっている。大都会では、なおさらだ。

北海道の霧多布（きりたっぷ）で永年、いろいろな動物と生活をともにしてきている畑正憲さんは「ムツゴロウの自然教育」の中で、「コンピューター学習器によって万の知識を詰めこむより、早起きして朝日が昇るのを見ることの方が大切かも知れない。生物としての十全の発育がなければ、人は人たり得ないと信じている」と述べている。同感だ。

子供は「自然の一部」といわれる。いくら物質的に恵まれても、自然界との接触を抜きにしては、その健やかな成長はあり得ない。

ところが子供を取りまく教育環境は幼い時から、そうした自然とのかかわり合いをあまりにも多く失ってきている。東京では、登校拒否、家庭内暴力に悩んだ末、親が一人息子を殺すという事件が起きたが、親を追いつめる子供の異常な姿も、日常的にみられる子供の無気力症状も、こうした自然を遮断した教育環境と全く無縁だといい切れようか。

だれしも親ならば、わが子が心身ともに健やかに、たくましく育つことを願わぬ人はなかろう。子供たちが育つ過程で、自然を遠ざけ学習一辺倒の生活を強いることが、いかに異常なことであるか。

こうした環境の中で、豊かな感情や他への温かい人間的な思いやりの気持ちなど根付くはずもない。動植物をめずらしげに見る子供の姿は、大人に厳しい反省を求めている。

56・5・5（毎日新聞）

習志野文化祭（袖ヶ浦公民館）

ふかんど

第111号

1981.11.2

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四三一三一六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

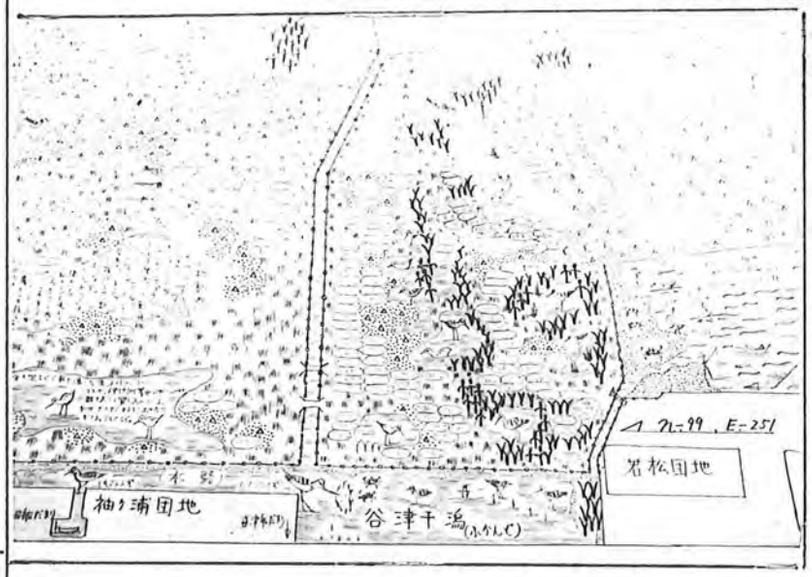
〈木の実のエサが少なくなる頃、いろんな鳥が、庭の「流し台」に来ていました。〉

干潟の絵が売れています

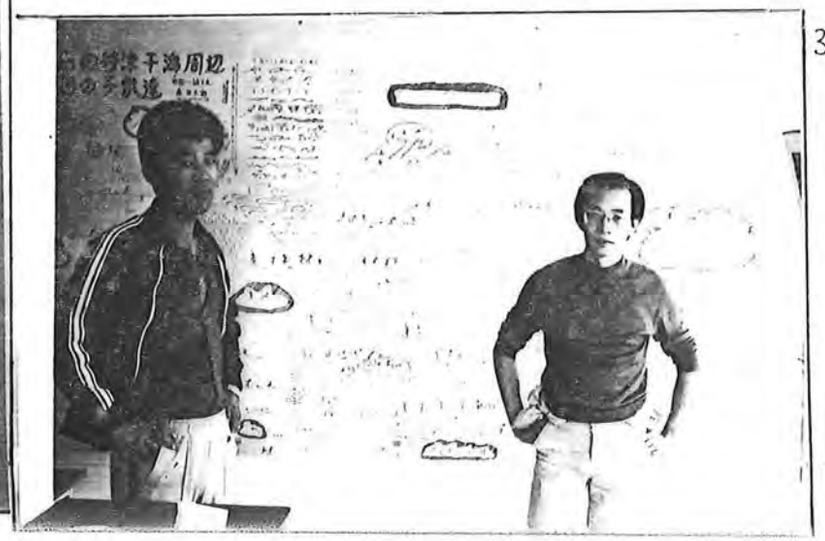
・「干潟の想い出の絵が欲しい人は、お金をカンの中に入れて持って行って下さい」。そう書いた紙を、絵とカンのそばに置いておきました。

誰もいませんし、お金を持って行かれても、タダで絵を持って行かれても、見ている人はいないので、わからないわけです。それがちゃんと、お金が払われ、なくなっていませんでした。会員が、「ひとつ、カケるつもりで、市民を信用しようじゃないか」と言ったのがきっかけ。絵は売り切れでした。

1) 展示室の入口



2) 昭和五十年の繁殖地図（京葉港・幕張）



3) 干潟の想い出の前で。長塚氏と私

障害にめげず

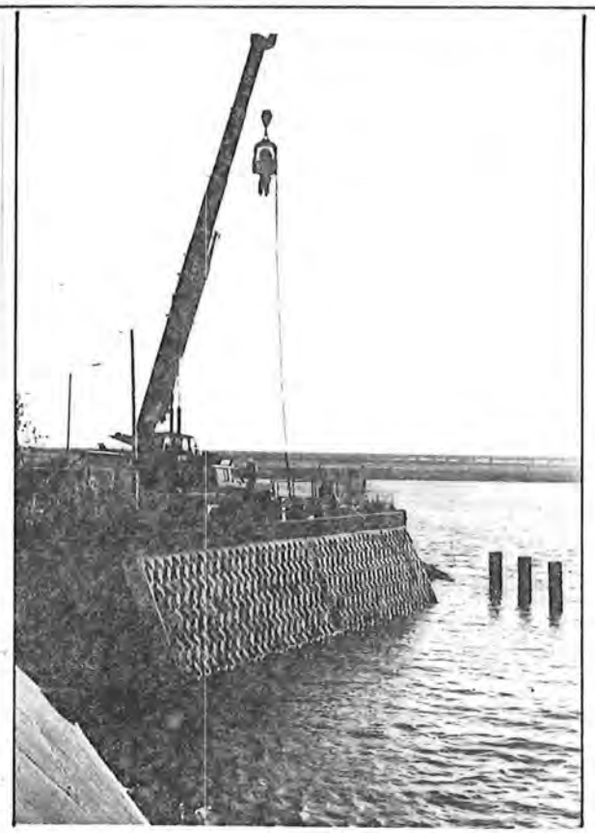
木植紀夫さんの作品です。この人は、重度の身体障害者です。どこへ行くのにも、車イスでした。全国のいろいろな所へと行っています。まだ若い方である。

公民館の玄関を入ってすぐの所に、二十点ほどのスケッチが展示してありました。（写真は一部）

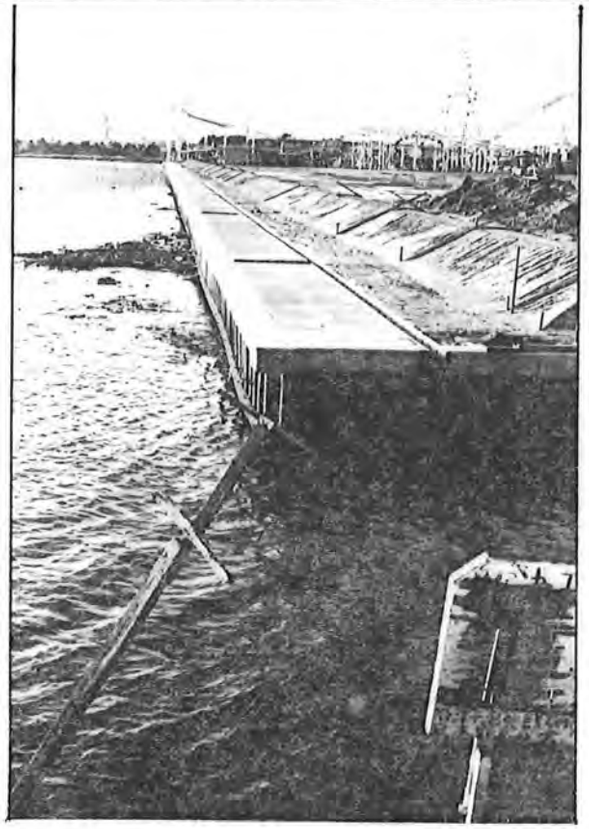
お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

橋がとりのぞかれました。

今年の、二月二十四日に着工されて以来八ヶ月ぶりです。又静かになっていきます。

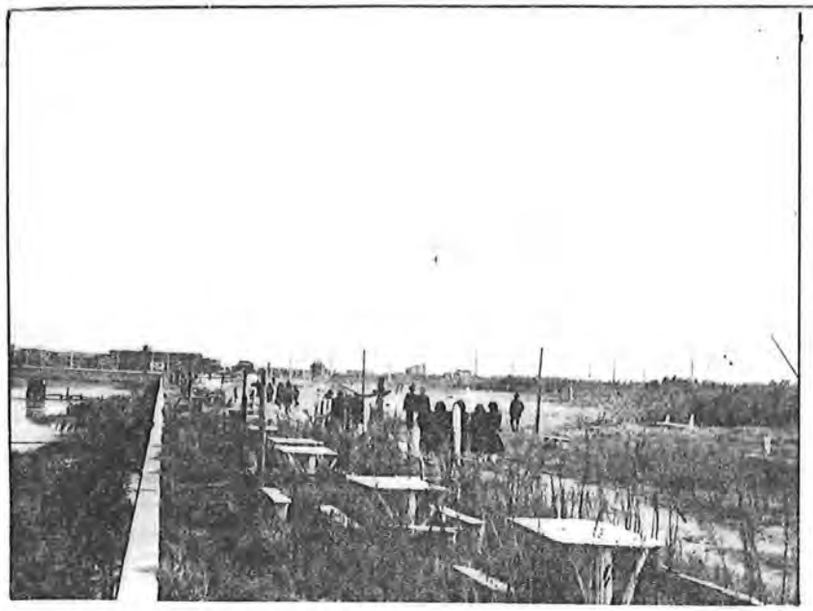


埋め立て地がわ ↑



↑谷津遊園がわ

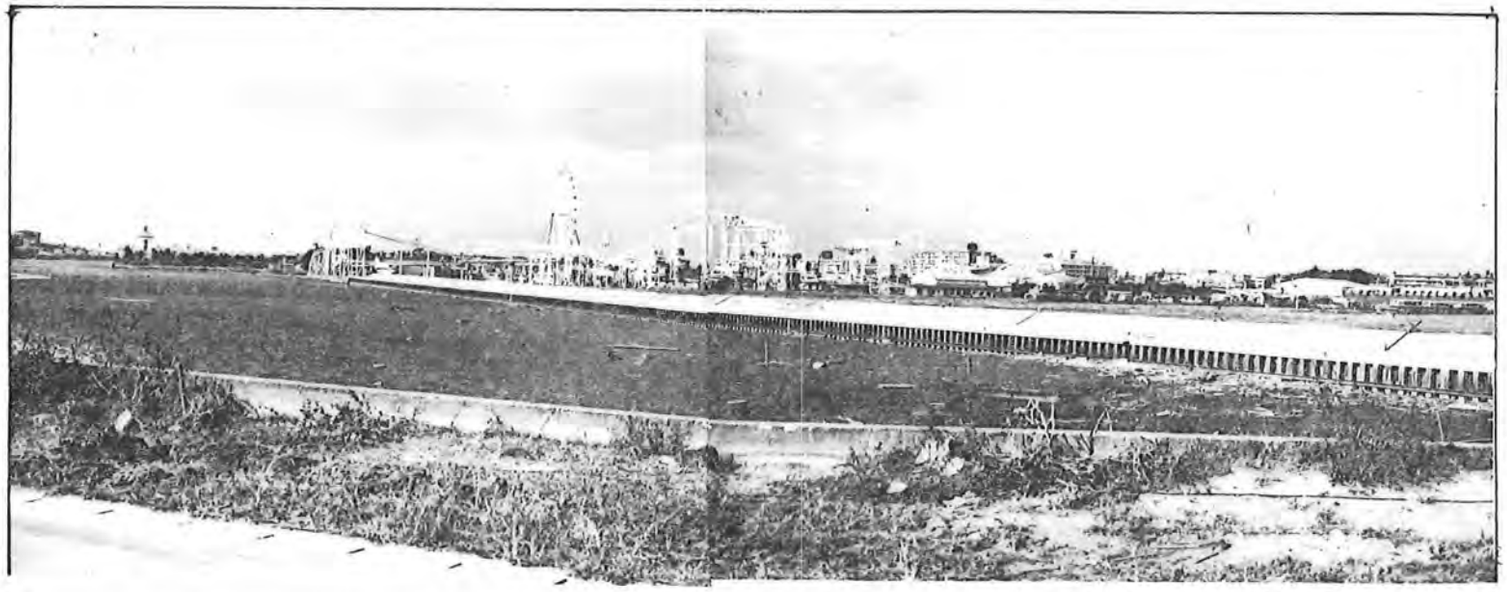
撮影 十月二十四日



ベンチと草むら
を散歩する生徒

きっと、津田沼高校の生徒たちでしょう。先生に引率されて、天気の良い日にはよく来ています。

幼稚園児から小・中学生も来ます。思えば、こういう所も少ないのです。



（全景写真）

こんばんは

★内田　朝雄★

"得になる側に立たぬ"心で

フジテレビ系「嫁かず出もどり小姑」（8・00）で舞台となる浅草の古山家の当主、軍内を演じている。がんこだが人情にもろいという下町気質の典型的人物である。

わき役の大ベテランで知られる顔だが、この人の渋い味わいは、内に秘めた文学体験からも出てくるようだ。「私の宮沢賢治」（農山漁村文化協会刊）の著作もある。

「僕と文学との出会いは、朝鮮に渡って平壌中学に在学していたころかな。もちろん戦前の話。バルザックの好きな親友が『もうバルザックは投げた』と言ったので『よし、じゃあオレが』と挑戦したのが始まり。どの小説も最初は少し退屈でしたが、そこを通過したらやみつきになりましてね。でも、召集されて軍隊に入り、戦友から初めて『雨ニモ負ケズ』を教わって賢治にのめり込みました。僕にとって賢治は、ありがたい坊さんの話より胸にこたえました。賢治の自分を犠牲にする厳しさに影響されて世の中の見方も変わりました。以来、得をする側に立つな、ということを僕なりの信条にしているんです」

10.26（ヨミウリ）

ふかんど

第112号

1981.11.3

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話 0473-37-6668
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

さぶろう、野菜うぅーん とぉとらなぁきゃあ だめだぁどぉー

「さぶろうぅ、お前よぉ、コーシー(ヒーしちゅうのぉ、御馳走なってるっとゆとこあんてじゃねえかぁ、あんまりみっともねえことすんなよぉー。その人はよぉー、お前のなぁなりふり見てよぉ、ちっと〝気の毒〟に思ってんじゃねえのかぁ?」。「そんなことねえだろうぅーーー」。「お前なぁ、あんまりペラくしゃべんなよぉ、母ちゃんはお前んことわかってんつもりだけどよぉ、世間のみんなから見りゃあ、お前のやってんことぉあんまりお前がムキなってしゃべってんとよぉ、〝唐人の寝言〟みたく思わんだかんなぁーーー、そんだどぉ」。「ーーーーーーー」。「さぶろう、なにかぁ袋ぉ持って来いやぁ。少し持ってってやれやぁ。んでなぁ、このありだの雨でえ少し水かぶっちゃったからよぉ、よく洗って下さいって言ってくれやぁ」。「おぉう」。「何んだあそりあ、ゴミィ入れる袋じゃねえかぁーーー、なんかほかにねえのかぁ?」。「いいい、かまねえよぉ」。「ちゃんとありさつしてえ言えよぉ、いいかぁ、黙ってつん出すなよぉ」。

母は、土いじり、畑仕事が好きなのだ。私と、その姿を見るのが、好きである。そう、だいぶ前のこと、母はこう言ったことがある。「三郎、人間の心って不思議だなぁ、ほんの二、三ヶ月前の事や、こっちに来てからの何十年間の事はよく憶えてねえのにぃ、小さいころ育ったよぉ、信州の長野の山々がよぉ、はっきり憶えてんだよなぁ、気持の悪いくれえ想い出す時があんだよなぁーーー」と。

〈その頃、ウミホウズキがいっぱいあって、干潟の沖へ歩きながら、母は、〝ギュウ、ギュウ〟と鳴らしていました。〉

私達が集めたゴミは、こうして時々持って行きます。でも、このところ、持って行きえがだらしなくなりました。でも、集めたゴミを持って行ってくれるだけでもマシです。他の団体もゴミを歩すだけでなく、協力して下さい。

シロチドリの群。潮が引いて、干潟が顔を出しかかる頃、写真のように、シギやチドリの群が次々とつき始めます。カモやカモメと違って、彼らは泳げません。この場面は、毎日の如く、潮の干満のたびにくり返えされております。将来、中央部に「島」を作ってやりたいもの。

干潟に冬の鳥が

日を追って、冬の鳥の姿が多くなってきました。ユリカモメやカモの類が目立つようになっています。コオロギやバッタ類は、ごく少しかいません。あと一ヶ月で冬ですね。

今、干潟の、東水路のすぐそばで、児童公園が造られています。

水路に隣接しております。石やコンクリートの使用済みのものが出ないよう、私達は注意していきます。

干潟の堤防ぎわの所に、ひとかたまりですが、黄色いセイタカアワダチ草が、とってきれに咲いております。

こういう〝にくまれ者〟の草でも、コンクリートだけよりも、はるかによいと私は思っています。将来、干潟を緑でつつみたいもの。

ふかんど

第113号

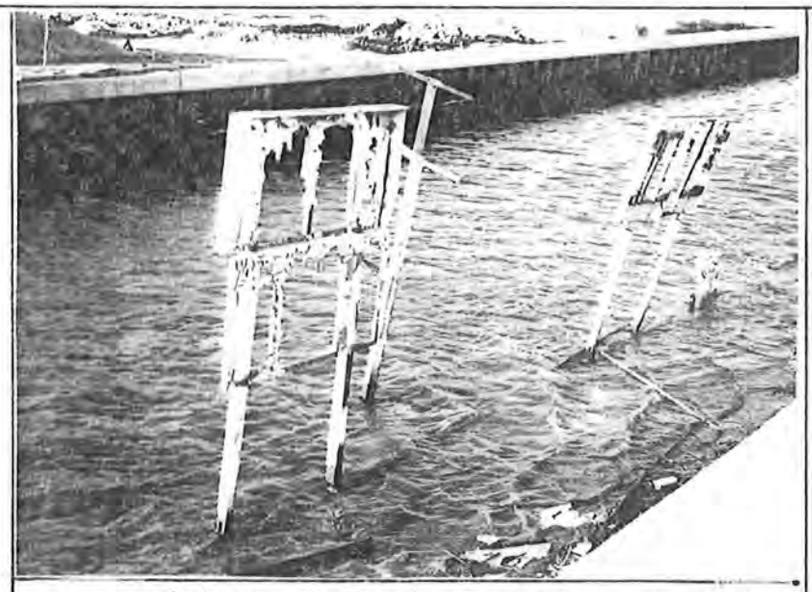
1981.11.4

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二丁目三五番六号
電話〇四七三(二)三六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

〈船からアサリを大きなベケシですくって入れて、見のむきさい工場から、海に水が流れていて、そこには、いつも、急が黒くなって群っていた。〉



谷津干潟自然教育園、と書いてあった。それから幾星霜、石をぶつけられ、棒でたたかれ、ゆすられて、今は〝根性〟で立っている。

すごい、がんばってます！

右の写真、看板を見て下さい。どうですか、この姿は。〝ヒウズタくになっちゃって、〝満身創痍〟とは、まさにこの通りのことではないだろうか。こうなるとどう、何が書いてあったのかサッパリわかりません。ベニヤ板なんぞはぶっち切れちゃって、角材と柱の、いわば骨しか残っていません。

ここの看板を立てたのは、確か、はっきり憶えていませんが、五十一年四月頃だった思う。従来の団体とは別の道をたどり始めていた。こうい看板を、前年の秋頃から立て始め、谷津干潟の全周に立てたのである。数にして、約百三十～百四十本ぐらいだったと思う。全て自分のお金だった。千葉の干潟を守る会や、野鳥の会・千葉支部からは、ビタの一文出ではいない。

不思議なことではあるが、別に意識としていたわけではないが、私のやって来たことは、すべてと言っていいくらい、私個人が思い立ったことばかりである。

その時の私は、その後も、今とそうであるが、〇〇会の会の為とか、会員とーてやったのではない。否定するのではないが、殆んど念頭に出ないか、さとなくば、はるか後方にしりぞいてしまって、重要視していられないのであった。もちろん、以前にも相談などをしたが、やればやる程、やる気がなくなってしまうのだった。いつなっても〝出発〟ーないし、物事が動かないのである。だから、やる時は、まず一人だ。

大半の人が〝知った時、納得した時〟、その時はどう、物事や事態が手遅れだったのだ。だから、相談しないと孤立した。でも、私はやった。物事を相談するのと、〝やる〟というのでは、少なくとも私の経験では、全く別のモノだった。

もし私が、干潟の会員や、野鳥の会・千葉支部の会員にとどまっていたら、そのワクや、中心的な人達の考えにとどまっていたら、又、企画や相談ずくでやっていたら、コアジサシ等の繁殖調査を、干潟の想い出の絵を、看板を、ニーブルとベンチを、あずまやを、クリーン作戦を、そーて、自然緑地などはなかったであろう。

Kさんの「人類滅亡説」

「そうだよ、私はね、人間ほどこの世に罪深いものはないと思ってるんだ。一刻も早く絶滅した方がいいんだ。人類滅亡は、早ければ早いほどいい。一日も早く人類がこの地上から滅亡する日が来てくれるのを、私は願うね！」。

ち、ちがいます皆さん。私（森田）じゃありません。私はただ、折伏さんようとしているだけです。実は、これは、京葉ホンダの社長、Kさんの確固たる信念の吐露なんです。さらにKさんは私に、たたみかける如く言う。「森田さん、ちがいますか、何が悪いかと言ったって、あらゆる生物の中で、人間ほど悪いことをしているものが有りますか、ないでしょっ。何でもかんでも、己れの欲望のままに、その目的だけで、みんな自分の好き勝手なことをしていく。こんな汚い、こんな醜い、これ程までに何もかも破壊していかなくては生きられないんなら、少しでも早くこの地上から消え去るべきだ」。「ーーーそうかね」。

時は昼食時。そばでご飯を食べている従業員は、「またか」とか、どうやって聞くかとまどっている。出ていく人もいる。が、誰もうなずいたり、身を入れて聞いたり、言葉をはさむ人はいない。要するに「何の応答」をない。感ずるところなく、だだこれ食事ーーー。

ところが私は、Kさんの説を何回も重ねて聞かされるうち、この頃、もしや、本当にそうかも知れないと、思い始めている始末です。

人と数字からなる繁雑にして、多種多様のストレスに抗しながら、いろんな事態を配慮しつつ自らの事業を進めてゆく。私から見ていると、野武士の風がある。その気骨を思わせるのである。日本中で、中小企業の経営者・事業主ほど、よく働くのはいないのではないか。錯綜したその事を、自らの他、誰が決断してくれよう。

「地球がバク発するとか、何か天変地異があってもぶんですか？」。「否、そうじゃない。自らの愚さからだ。知らない信じない、愚を愚として認められないからだ」。続く。

女を磨く

花井　幸子＝イラスト

仕事柄、実にいろいろな相談を受けます。つい先日、友人の結婚十五周年記念のパーティーでのこと。幹で知られる芳町の芸者さんがいわく、「私も洋服を着たいんだけど、どうしても照れくさくってサマにならないの。どうしたらいいかしら」。ピタリと決まった水色の着物姿、頭から足の先までを一目見て、私は「まず、ヘアスタイルを小さくすること。それから先は、どんなものをお召しになってもはずかしがらないことです。お組（ねえ）さんたち、着物を着て帯を結んで出来上がった時、最後にポンと帯をたたくでしょ？　洋服もそれと全く同じ。さ、見て下さい、という心意気一つなんですよ」と申し上げたわけです。新しいものを着る時は何よりも自信が大切。そして敬意をこなしていくことでしょう。

着こなしは心意気で

私は、デザイナーになる前は、ファッション・イラストレーターのはしくれでした。服を作るようになった言っかけは、欲しい服がなかったためでした。さっと二十年前、私がまだ二十歳になったばかりのころ、ファッションの世界は、いわゆるオーダーメード盛んな時でした。どのスタイルブックをめくっても出てくるのはマダム然としたものばかり。若者向きにはちらほらとアイビー・ルックが出てきましたが、女の子らしいロマンチックなドレスの既製服やプレタポルテなんて、皆無というほどない時代でした。そんな時、私が勤めていた広告会社にたまたま、若い人向き週刊誌の仕事がきました。ウイークリーファッションというページを作ることになり、若いデザイナーやカメラマンのグループができて、楽しいものを作りはじめたのです。

絵だけを描いていたころと違って、これは、骨の折れる仕事でした。絵の世界なら、第親は自由気ままに、トリのような女、スラリとした柔軟な肢（し）体、陶器のようなはだ――何だって描けて「絵ごとこと」ということがあるぐらいですから、楽なのです。ならばいっそのこと私は、理想のプロポーションにはほど遠くても、人間くさいのある、笑顔の美しいきれいな人を作るお手伝いをしようと思ったわけです。

すばらしいものを作って下さる方もいらして、女性としてはうれしい限りです。でも、現実には、理想の女性、いわば絵のような女性をさがすとなると至難な方がいます。然々と考えて、

もともと私は、布が好きでした。大きなそれも風にゆれるような布です。シェークスピアの亡霊が宿っているマント、パリの凱旋門の三色旗、風にドヨーと押し寄せる感じです。一枚の布をまとうことが、洋服の原点だと思うのです。洋服は、単にファッションショーで美しいだけでなく、生身の人間が着て、生活して、活動した時に躍動感があるものが最も好ましいのです。洋服は人間が着るためのもの。着こなしとは、心意気ではないでしょうか。

次に大切なのは、バランスの感覚です。自分の体型をしっかり知るためには、まず、鏡に全身を写してにらめっこしなくてはなりません。できれば、一人でなく友人と並んでくつをはいて全身を写し、長所と短所を再確認してみましょう。「女をみがく」には、自分をよく見つめて冷静になること。長所を生かし、短所をカバーするために、自分にいちばんいいバランスを見つけましょう。

（ファッション・デザイナー）

52.4.23（読売）

● つながっているのは、自然界のモノだけじゃないぞ。人間の心身のいろんな働らきも、深いところでつながってるんだ。知らなくとも。

ふかんど

第114号

1981.11.5

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話(四三)一三一一六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

秋の陽射しを浴びて立っています。これも流木です。でも、こうして使えばなかなかね。

子供達にいろんな特技を

たとえば、ゴカイがしこたまいる所を捜すのがうまくって、その掘り方や、ゴカイがちぎれないように、絶妙なつかみ方をして、見る者をして、〝芸術的〟の感ずら抱かせるような子はいないかなぁ。

バシタならバシタで、どんなバシタはどんな所が好きで、あのバシタはああいう草があいうふうにあん所で、ああいう日にいっぱいいて、つかまえる時は、こういうふにつかまえればいいかを、誰よりもよく知っている子。

ミミズだったら、どんくらい地面が湿っている所にいっぱいて、どういう天気の日に、どんなものの下をほじくったらよいか。地面の色はこう、かたさはこんくらい、日当りのぐあいはどんな所がどんなふうに違って、地面はどんな感触の所のものがよくって、どんな色いのすった所をミミズの好むのか。

ゲンゴロウやミズマシやアメンボだったら、どんな地面の水たまりや池だったら、まわりにどんな草が生えていたら、どういう色いのすった水が彼らは好きなのか。水草は、水の中にあった池の方がいいのか、それとも、水の上に浮草なんかある池の方がいいのか。水は古いやつと新しいやつとはどっちが好きなのか。雨が降った時はどんな所に行けばいっぱいて、晴れの続く日には、どんな所に彼らはいるのか。いつ、朝か昼か夕方か。

あのすばしっこいキリギリスはどうやってとるか。草の高さはこれ位の所。草の生えぐあいはこれくらいの所。そっと近ずくには、体の前からか、後からか、それともよこからか。草むらの中を音をさせないで歩くには、どういう足の運びで、どうやってつま先から草むらに足を入れたらよいか。姿勢は。要注意のキヨリは。つかまえる瞬間の手や足や体のさばきぐあいはどうすればよいか。オレがこの位置で彼はあの位置とあの体の向きだったら、どっちの方向に逃げるか。ーーーまだくいっぱい。

実は、右の如き事、自然保護関係者にちょっと言ったことがある。ちっとだ。が、だめだ、変な顔された。要するに知らゆえんだ。

〈釣りの道具を余り買えないので、潮が引いた後に、杭や石にひっかかっている針や重りを。台風の後に行っては、流れついた竿を拾った。〉

お振込は千葉銀行012−54253
谷津干潟愛護研究会

谷津干潟展の皆さんの感想

愛鳥度テストが役に立ったようだ。妹が喜んでいる。干潟の風、虫が楽しい。
南地（袖ヶ浦）

鳥の写真がとても可愛い。愛鳥度テストをして、鳥ちゃんとした鳥の保護の仕方が分かった　立花（袖ヶ浦）

参加できるときがあったら、いっしょに参加したい。いつまでも、干がたに鳥がいるように…。　池田（袖ヶ浦）

たこ　いか　つぼ松　ハゼ　二枚
かわいくてたまらない　こんな鳥がいつまでもいますように
M.A（袖ヶ浦）

鳥のテストをして、おもしろいと思った「す」があたたかそうだった。
W.S（袖ヶ浦）

ゴミ捨て場が、みちがえるような、きれいな干潟になっていました。
森田さんの行動力に感謝します。と同時に励まされます。
今後の活躍をお祈りします。
下地紀夫　姉洋子

11/3　船橋ハやし連　~~荒沢啓太~~
水保忠男　石上　タ加り
鈴達也
鈴真一

こあじさしのヒナが　かわいかった！！

11/3　写真がとてもきれいでかん動した。
浜川　(女)　4-6-15　A・H

11/3　かわいい鳥がたくさんいた。こんな鳥を実際に見てみたい。尾崎
いろいろな鳥がいてびっくりした。
おもしろい鳥がいっぱいいるのでかわいかった。工藤

その時その時に・・・

「こんなこと、いつまでやってても駄目なんじゃないだろうか、そろそろこのへんであきらめて、別のことでも考えようか・・・・」。今まで、何回もそんな気持になったことがあった。見通しも確信も萎えた時である。そういう時に限って、必ずとは言えないが、ひょこっと何らかの形で、元気づけられ、励まされたものである。

私は、そこで又、やる気新たにして、モゾモゾ動き出して行くのであった。つまり何と言おうか、精神的戦線、あるいは心の陣形を立て直したのである。思えば、私という人間は、ちょっとしたことで気落ちしたり、又小さな、ちょっとしたことで勇気づけられてきた。自分でも、心がそういうふうにやたらと振幅があるようでは、いけないんじゃないだろうかと思っている。皆さん、何かいい方法みたいなものがないでしょうか？。お願いしますよ、あったらひとつ教えて下さいよ。少しぐらいの「授業料」でしたら、よろこんでお支払いさせていただきますよ。

それとも、こういうことは、運動らしきことをやってる人間の〝税金〟みたいなものでしょうか。そして、気落ちしても、いつまでもそれに浸ってはいられなかったしね・・・・。

於　袖ヶ浦公民館

ふかんど

第115号

1981.11.5

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二丁目三五～六
電話〇四七三―三六―六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

人今頃、椋の実がいちばんうまい。木の下から見ると、オレが食べるものと、鳥も喰うていた。そしたら、「変な、親しみを感じました。」

10月31日　主婦　吉田妙子

初めてやって来ました。

夫と子供の3人家族は、もう何度もここを訪れているようで、かんさつ舎を"クローネの小屋"と名づけて、とても親しんで居ります。

5才のみっちゃんと、3才のありちゃんとパパは、この小屋を増設しなくては…と思って居ります。

人間ってとても欲ばりな感じします。

凡ての生物は、共に生びてゆきたいと常々思って居りました。

進歩と発展はいつも破壊を土台にしています。

どんなに繁栄しても、心に安らぎがなかったら、とてもつまらないでしょうにね。

あ、今、白鷺が3羽、水面すれすれに飛んでいます。

びっくり。細々と自然がまもっているのですね。

大事に大事にしなくては…。

森田、心で、泣いております

あぁ、よかった、うれしゅうございます。これで、森田、すべての苦労が、消え去りました。疲れがいやされました。報われました。

二年前、七月半ば過ぎの真夏です、たった一人で作り始めました。その夏の、セイタカシギの見張りと繁殖調査、この二本立てと何とかやり終えるやいなや、すぐさま、右の文章にある「クローネの小屋」を、八つ作るべく着手しました。炎天下のヨシ野の中、風が全く通らないのと、草いきれ。それはそれはものすごい汗が流れました。まつげも、胸も、ひたい、ハナの先から、汗がポタポタ落ちるのです。ぬぐっても、汗で見えなくなってしまうのです。にじんだ片目がやっと。愛護会の会員は、一人。会長のぼく。勝手に名刺を作って、ただ「走れ、コウタローし」の調子。

マーちゃん、三十年前に教えてくれたこと、今、右の手紙を書く人がいましたよ。

●こんな人がいるなんて知らなかった。あの汗、孤独、心細さ、ムダじゃなかったんだ。

質問、ところで、「クローネ」って、何ですか？

谷津干潟のまわりで・・・

何でまたオレに・・・

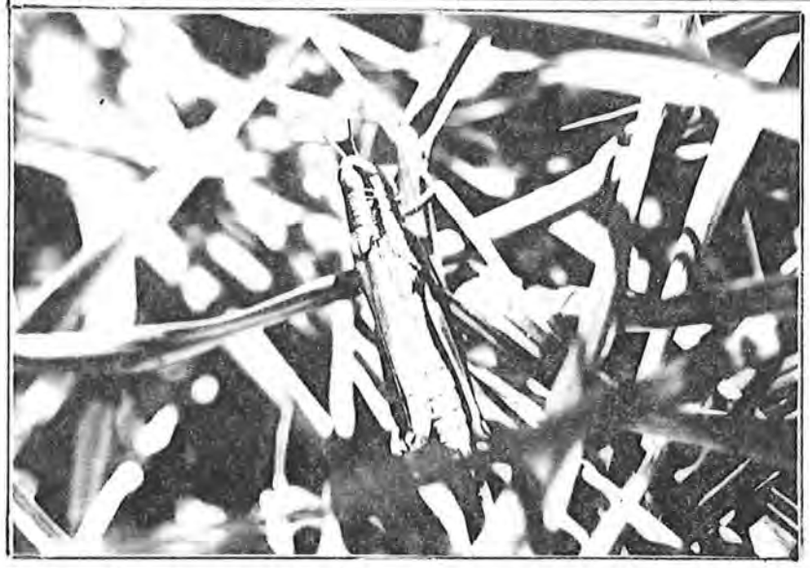
「森田さん、あんた知らないかい？、あすこのほら、水道のツマミさぁ、アレ、ゆえんだよなぁ。あんたに聞けば知ってんじゃねえかと思ってさぁ」。「ええー？、知りませんよぉ、何で私にぃ、これで二度も聞かれてるんですよぉ。人間さわるいなぁ－－－。知ってるわけえねりでしょぉ、失礼しちゃうねえ」。

干潟に隣接する袖ケ浦の自治会長、三代川さんは言うのである。この人とは時々話をする。きっと、私達が汚れた手足を、その児童公園で洗っているのを知っているからだろう。こっちを困ってるんですよ。

谷津干潟のイナゴ

イナゴは、稲ばかり食べるものと思っていたが、そうじゃないらしい。

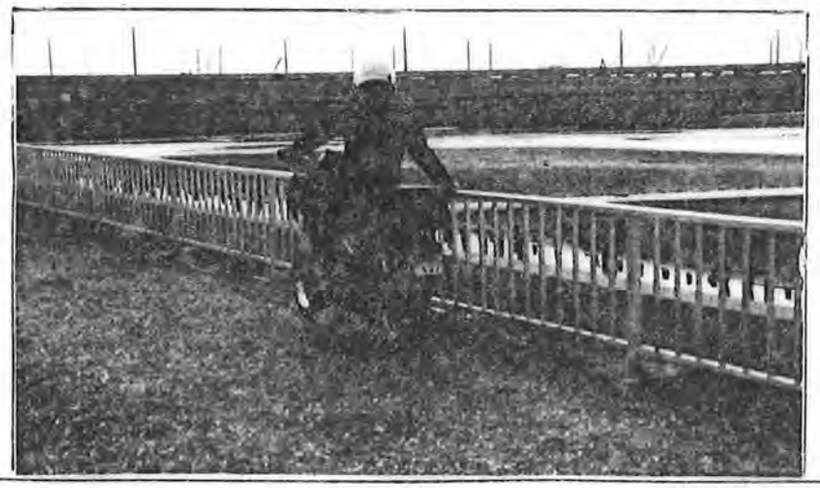
自然緑地の草むらで、時々見かけるようになりました。何を食べているのだろう。そのうち、イナゴとりでも出来るようになるかも知れません。



郵便配達の人と

カモの群が、堤防の近くに集っているからだろう。ハマシギなども、すぐそばまで来てエサを食べている。

そんな光景を、通りがかりのいろんな人が立ち止って見ています。



52.4.18（毎日新聞）

編集者への手紙

育てたい 野性と品性

――子供の長所を伸ばす試み

飴屋 善敏

「うちの子を本当に引き受けていただけるでしょうか」――はっきりおっしゃらないが、話の様子では相当のはみ出し子で、手におえないらしい。ある雑誌に、私たちの創造活動グループ（長期の合宿による創造性を高める実験生活グループ）が紹介された時、何人かの方が、子供をぜひ参加させていただきたいと私のところに見えた。しかし、いざわが子を手元から放して他人にあずけようかという実行の段になると、多くの人はおじけづく。

小学校一年の最年少者を含む大人の活動グループの中に、新しくKという一年生の男子が入ってきた。確かに手が焼ける子だった。しかしKは、まるで洗たく機の中に巻き込まれるようにもみくちゃにされながら、こく自然に既存のグループの子供たちの中に同化していった。

毎日、学校から帰って全員そろうのが五時半過ぎなので、それまで自由にしておいて、その後、発声の練習やオペラ、合唱の練習をする。音楽で歌うことのきらいだった子供も、いまやピアノのきいたきれいな声で、よく歌うようになった。

この春休みのある日、私は「紙鉄砲を作ろう。裏の山にササ竹がある。地図をかいてやるから、みんなでとってこい」と言ったらしい。しばらくして子供たちは、長さ十数メートルの竹を近所の竹林から切りとって、そろそろひきずってきた。

子供たちは、「紙鉄砲」を「竹鉄砲」とまちがってすることの能力は、相殺するものではない。両方を高度に育てなければならない。そして、この相反言ったつもりだったが「紙鉄砲」を「竹鉄砲」とまちがってすることの能力は、相殺するものではない。両方を高度に育てることを教育であると思う。一口にいって、私はこの子供たちに野性と品性とを育てあげてゆきたいと思っている。

自分で考え、積極的に生きてゆくという思考の働きは、子供のうちに考えたり、感じたりしていないと、育たないのである。青少年の無気力さと無感動さが年々エスカレートしていく原因は、その能力を働かせるチャンスを、大人たちが何かにつけて奪うからであろう。私の試みは、過去十五年間積み重ねたさまざまな活動の延長として始まったのである。将来の子供の幸せを考えたときに、学校教育のゆがみが直るまでは、我々のようなものが〝第三の教育の場〟を作ってゆかなければならないのだろう。

いま創造活動グループにいる子供たちは、次第になぐさしく育っている。しかし、このような活動をさせるにしても、その前に、親のわが子を育てる上での判断力が必要なのである。

（大学講師・44歳・東京都町田市）

中々おもしろい試みだと思う。それにしても、こういうことをしていくには、かなりの根気が必要とされるにちがいない。それにはまず、大人がそうなるべきかを。

習志野市文化祭（袖ヶ浦公民館）

ふかんど

第116号

1981.11.7

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二―三五―六
電話〇四七三―三八―六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

〈夏にはあんなにいっぱいいた、虫の姿をめっきり少なくなり、陽だまりのハチやカマキリを見て、子供心にも、「そのあわれ」を感じました。〉

谷津干潟のみんなの感想

とても大切なことを骨折って下さいまして、ご苦労様です
ありがとうございました。　　村松七郎（船橋市）

ますますの御活躍を祈って居ります
戸田与志子

とてもおなじことです
関本と入沢と大山と西村
オットセイがとてもおなじ
とでは田田田田村のほうのブ田

"干潟の思い出"という絵がおもしろかった。
三橋しのぶ

セッカのおうちがかわいかった
豊田真澤子

オットセイ　そのほか　いろいろな　どうぶつや　とりの　ひなや
とりの　すの　いろいろな　かんさつが　できました。
海老名恵

ウミネコのたいぐんがたくさんいるからとてもおどろいた。

まだまだPR不足です

谷津干潟という名前は、どうやらある程度、一般に知られてきたようだ。四、五年前に比べれば、その実では前進したと思う。しかし、その現実や内容は、まだ〈訴えなければならないところ、大なるものがある。干潟の価値や評価というものは、それにとをなってか、さをなくば、引き続いてくるものであろう。

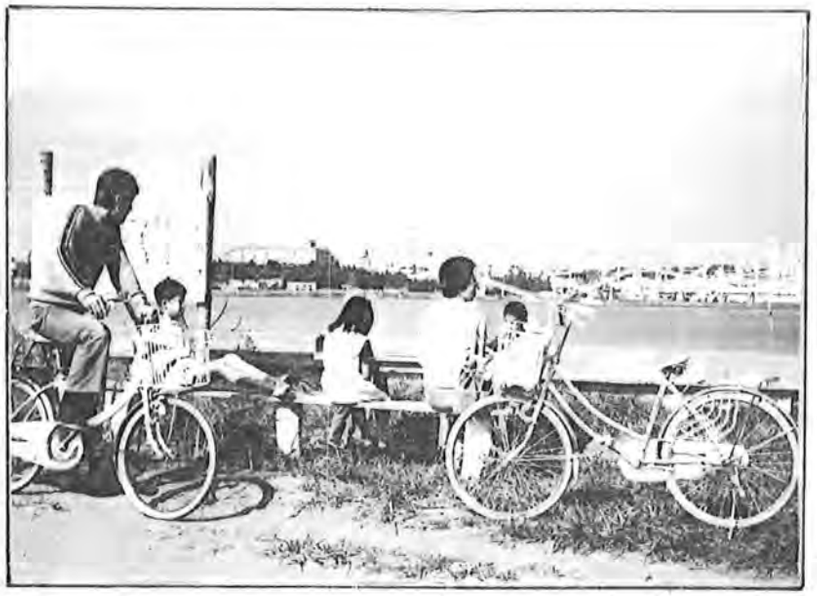
どう思うか、イエスかノーか、という判断よりも、谷津干潟の実体が、あまり知られていないようでは、話しにをならない。

今回の様な展示は、公民館や銀行をはじめとして、人が多く集まりやすい所に、出来るだけ数多く回数を積んでいかねばならない。今ある〝手持ちのカード〟を、フルに活用しようとするその気さえあれば、力、小なりとも、他の人の思うよりも可能性は大と信ずる。

お振込は千葉銀行012―54253
谷津干潟愛護研究会

秋晴れの谷津干潟

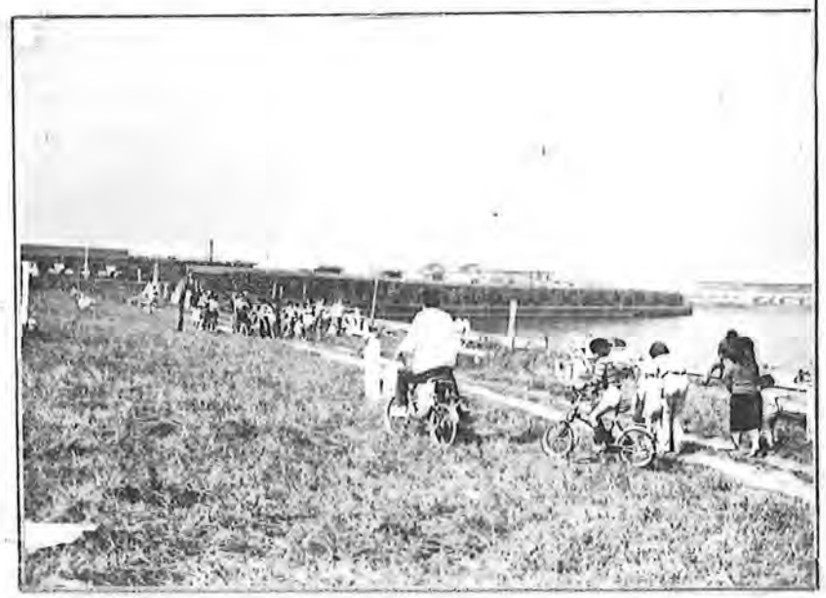
十一月一日(日)。
この写真は、その日の谷津干潟自然緑地のようすです。
どこか、町内会の人達が集って、親子の運動会をやっていました。すぐそばを、秋津や香澄の団地の人が散歩に来たり、自転車で通っていく。



私達が望遠鏡をのぞいていると、「ちょっと見させていただけますか?」とか、「どんな鳥が見えますか?」と言いながら近づいてくる。日曜日や休日ごとに我々が、谷津干潟に行ってプロミナーや双眼鏡を、見やすいように置いておくのをこういうことの為なのです。

月に一度だけの観察会だけでなく、常日頃から、いつをこう受け止めたいなどのは必要と、そう考えてのことなのです。

数年前よりも、この附近の人達は谷津干潟に対して、深い関心を持っております。それは、私達に話しかけてくる人が多くなったこと、話しの内容が単なる会話から、環境保全など、積極的な希望や意見をはっきり言うこと(と変ってきています。



新からだ読本

仮面とからだ

竹内 敏晴 ⑬

最近、タイ・インド・韓国などから仮面舞踊劇がやってきた。オセアニア、アフリカ、アメリカ・インディアンなどの仮面の率直さ力強さはよく知られている。日本にも豊かな仮面の伝統がある。

「面」はそれ自体精霊であり鬼神であって、人が着けるとき生きて動き出すのであった。だが現代では仮面は人が冠(かむ)って身振りし奇異な外面的効果を狙うものとしか考えられていない。果たしてそうか。

仮面をはじめて冠ってみるとき、多くの人に変化が起きる。仮面のうしろにかくれた感じになってホッと安心したとたん、世界がくっきりと大きく見えてくる人がある。顔が上がり、笑い出し躍り出すことまである。逆に世界が遠く小さくなり凍結して怖さにふるえる人もある。手や足が自分から切り離されて見え、呼吸が粗くなり、ことばが出なくなるのは常のことである。

「面をつける」とは、自己の存在感が、世界が、他者が、変貌(へんぼう)し始めることなのだ。

仮面は、市民社会の心理描写を尊ぶとする近代の精緻(せいち)なリアリズムによって、舞台から追放された技法の一つである。だが古代人のからだは、仮面をつけたとき、まだ生き続けていることを私たちに証(あか)しする。からだは炎となって怒え狂い、あるいは笑いの精霊と化し、また残酷にして快活な道化として跳ね転ぶ。

近代が終わるとき仮面の劇はよみがえるであろう。それによってしか支えられぬ巨大な情念と幻想と空間とが人類にはある。それによってしか出現せぬ「からだ」があるのだ。

(宮城教育大教授・言語指導)

私観ではあるが。テーマとしてはとても興味深いし、生き生きとしたものに出来ると思う。しかし、文章がむずかしすぎるうらみがある。

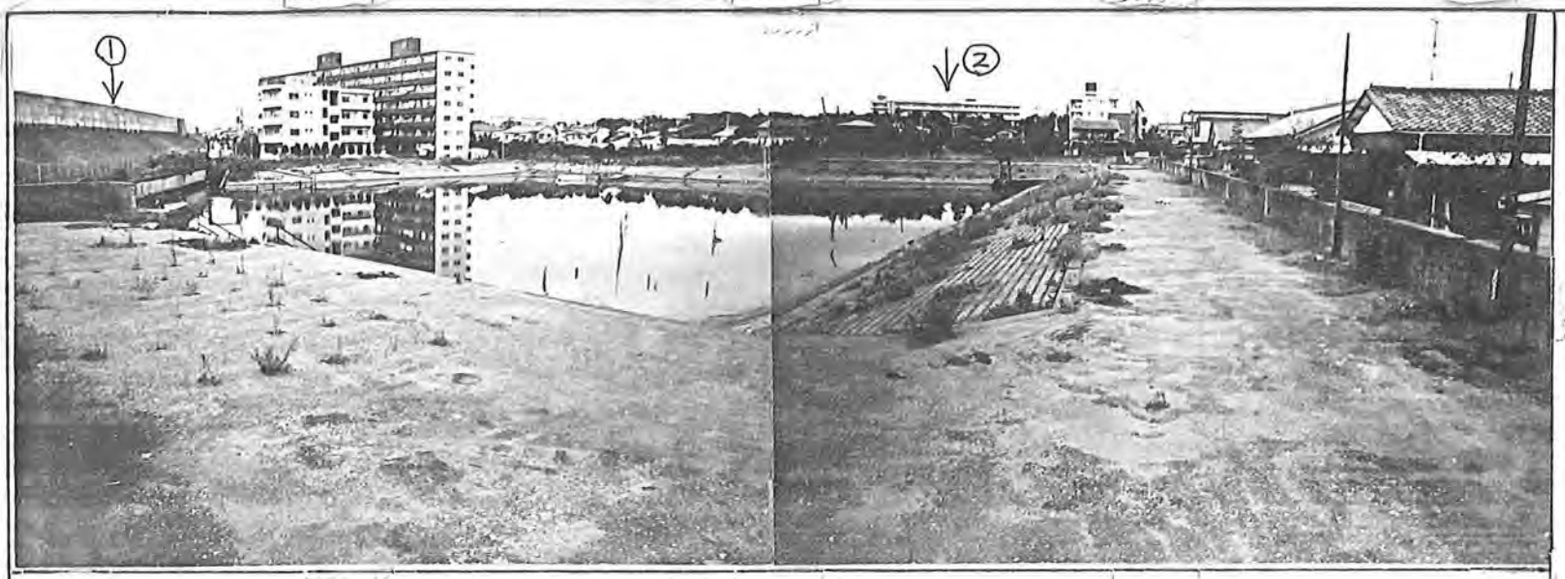
56・10・26 毎日新聞

ふかんど
第117号
1981.11.8
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市北方二―三五―六
電話(四三)一三八―六六六八
文責 森田三郎
会費年2000
創刊 1980.6.3

谷津の船溜まり

谷津干潟の西端、住宅地の方に入りこんだ所にある。まわりには民家が、びっしりと建っている。勿論民家の所も埋め立て地である。

埋め立て後しばらくは、「海で漁が行われていた所だなあ」という名残りがあった。



写真のようになったのは、昭和三十七、八年である。京葉港埋め立て・第一期工事によるもの。 ①は、京葉道路 ②は、習志野市立向山小学校

人潮が引いたあとの干潟に波の形が残っていて、走ると、足の裏が痛い程かたかった。べカ舟・魚網・ノリの竿や網・船のロープ・イカリ・しょいカゴ・貝をとる道具などが置かれてあった。

やがて、それらの姿が一つ、又一つと消えていった。その間、「置いてあった」ものが、「そのまま」にしておかれるような感じになり、数が少なくなっていくのと共に、「ほったらかし」のありさまになっていった。

船を引き上げる為の斜面の石には、はじめの頃は殆んど生えていなかったが、年々雑草が目につくようになってきた。かつて、べカ船をつないでおいた水の中の竿が、船溜まりのあちこちに、ただポッシリと、水面に姿をうつして立っている。

ふた昔前、この辺一帯は砂質の、広い干潟であった。潮が引いてもこの船溜まりに水が残っていて、たくさんの船が竿につないであったり、イカリでとめてあった。ここから沖へ出るために、川のようなミオが広い干潟の中を通っていた。私の幼い頃には、まだ帆かけ船が走っていた。船溜まりで帆を張り、ミオを通って沖へと出てゆくのであった。そして又、白帆の船がミオを通って、ここに入ってきた。船溜りから陸の方に少し行くと、広いヨシ野が茂っていて、ヨシキリの声がかまびすしくさえずり、人のあまり通らない淋しい所だった。丘の畑や林の中から、夜、キツネが干潟に出て来て魚を喰っていた。タヌキもヨシ野にすんでいた所だった。

お振込は千葉銀行012―54253
谷津干潟愛護研究会

もう十年程前のこと、大正時代の古本、道話集の中に次のような話があった。

「或る人、失望と悲嘆の果て、自殺せんとのと旅に出ず。とある旅籠にて思いを遂げんと意を決し、暗き夜半に起きて独り座す。かく見るのもこの世にて我の最期かと、そこはかとなく暗かりし部屋を見まわしぬ。屏風あり。書かれしひとつの言葉あり。闇に判じ難きも目は慣れぬ。曰く、

裸にて
生まれて来たに
何ふそく

との、すなわち是なり。

彼の人、しばし見入たり。後、判然と悟るところあり。身仕度整いたれば、夜を明けやらぬ中旅籠を出で、家路につきたり」。以上、大きな違いはないと思う。

私が心酔した、ラルフ・W・エマスンの言葉に、「この世には美しきもの、良きものがたくさんあるけれども、それとても人はやはり、己れの今在る所に立ち、その原因と手だてをまず自分の内に求め、そして、我が心田を耕し、そこで実りたるものを獲るほか、あることなし」という意味のものがある。

名月を
取ってくれろと
泣く子かな

その子と私と、どれ程の違いがあるというのか。「泣くようなこと」ばかりの、くり返しが日常の私である。そんな自分に、つくづくと嫌気がさしているが、懲りないところをみると、嫌気が足りないのかと。

ゆめ、ふりあい

八代英太

（やしろ・ひでた）昭和三十年、前進座入り。昭和四十二年、NHK「三人会議」で初出演。昭和五十二年、石川県高岡市生まれ。現在、参議院選挙当選。

昭和四十九年三月三十日、八カ月の闘病を終え車椅子の第一歩を踏み出した頃、森繁久弥さんに会った。芸能界入りした私の目標は森繁さんであり、テレビタレントとして活躍をはじめた頃は顔面にめがねとひげをマジックで書いての森繁節ばかりで、自称一番弟子のつもりでがんばっていた。その日車椅子をこぎながら森繁さんを仰ぎ見たとき、眼鏡の奥からニッコリほほえんで「がんばったネ」そう言って私の車椅子を押してくれた。社会復帰したての私は、まだ不安の毎日で人前に出ることすらも臆病になっていたときだったため、この一言は万感胸にこみ上げて、涙があふれ仕方がなかった。芸能界に入り森繁さんを心の師と仰ぎ、目標にしながら努力していた私は、転落事故をきっかけとしてその夢は挫折せざるを得なかった。「すみません」と森繁さんに詫びたい気持ちを抱きつつの出会いであっただけに「がんばったネ」のことばに、遠く何年も離れていた父と子の再会のような感じで、どうにも涙がとまらなかった。

健康な頃は、近よりがたい人だったが、勝手に森繁さんを真似ながら商売をしていた気まずさもあっていつかはお会いしたいと思いつつも、そのチャンスはめぐってこなかった。「あゆみの箱」の運動を通して、多くの障害者が森繁さんとの交流を深めていることを知り、車椅子でならお会いして人生の区切りにしようと思った。

車椅子に、強く温かい励まし

森繁久弥さん

（もりしげ・ひさや）大正2年、大阪生まれ。早大を中退、昭和11年、東宝劇団入り。ロッパ一座を経て同14年演劇入社。その後アナウンサーに転向。戦後、NHK「愉快な仲間」で売り出す。映画、テレビ、舞台で活躍している。

いろいろな話を伺ったことを覚えているが、ただうなずいていた私だった。励ましの言葉もいくつかいただいたが、感激と緊張とで、かえす言葉もなく時が過ぎた。別れ際に一枚の紙へ森繁さんがスラスラと言葉を書いた。

I cried because I had no shoes Then I met a man who had no feet!

この言葉はアメリカの有名な詩人が書いたものだと言う。横文字に弱い私だが、この言葉をていねいに反復しながら、障害を持って、ともすれば弱くなりがちな私に対する森繁さんからの言葉のムチの様に思えた。

「私は靴がないと泣いた。すると、その時私は足のない人に出会った」

車椅子になって八年、苦しいこともつらいこともあったが、その日以来、私はふり返ることを極力しないように心がけた。後天的な障害は、かつての健康なころを振り返るがためにそのギャップで心に迷いが大きくなる。いくら振り返ってもどうにもならないのだからいちはやく明日を見つめることだ。そう自分にいいきかせてそれが森繁さんへのお返しになるだろうと大きく人生観が変わったことを覚えている。

しかし車椅子タレントとしての活動も障壁に当たり、いろいろなあらたな悩みが生じてきた。昭和五十二年四月、折から参議院選挙が目前に迫り多くの仲間たちが一石を投じて欲しいと出馬要請が相次いだことがあった。森繁さんにはたとえ車椅子になっても初心忘れることなく、タレントとして生き抜く決意を語っただけに、ここで重大な決断をしなければならず、再び、森繁さんにその判断を仰ぎたいとお目通りを願った。私はどうも勝手がすぎる。弟子でもなく、日頃懇意の間柄でもない森繁さんにこうした人生の判断をお願いしようというのである。しかし、初めて会ったその日からではないが優しい温かさに包まれた森繁さんを信仰のような形で私の全身はとらえているのかもしれない。そしてその図々しさが、ためらうでもなく森繁さんの楽屋を訪ねさせた。

「俺は政治は大嫌いでね」帝劇の芝居の幕間に、むこうを向いたままそう答えられた。このときも私はだまっていた。訪ねる前は、率直に自分の主張を述べ、車椅子タレントとしての限界や、障害者のさまざまな問題を訴えようと思っていたが、いざその時になると言葉にならない。私が語る前に、何故私がこの楽屋を訪ねたかを森繁さんはお見通しであった。「俺は政治は大嫌いでね」……そのあと何をおっしゃったのか、ただ私はオロオロしていたにちがいない。

この日カミさんが目を赤くしながら、私の気持ちをかわりに訴えていたことを覚えている。その時、帰りに一枚の色紙をいただいた。「太陽は誰の上にも照らす」であった。

私はこの言葉を見る度に、心がひきしまる。陽のあたらぬところはあまりに多いけれど、これは太陽があてないのではない。誰かが、その陽をさえぎっている。富める人にも貧しい人にも、強い人にも弱い人にも、歩ける人にも歩けない人にも、太陽は平等に陽をあてている。いやあてようとしている。すべての人に太陽の暖かい陽ざしがあたるように、誰の上にも陽が照るように、その努力を小さな力でもやることがおやじさんへの恩返しのように思う。

10.29（日本経済新聞）

ふかんど

第118号

1981.11.9

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五ノ六
電話 0473ー三八ー六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

へうなぎをつかまえると、キャンデー売りのおじさんに、ウナギとキャンデーをとりかえてもらった。

谷津干潟

鳥獣保護区に指定へ

千葉県、再び方針固める

千葉県は県第五次鳥獣保護事業計画（五十七―六十一年度）で、谷津干潟（習志野市）を鳥獣保護区の指定対象とする方針を固めた。谷津干潟はシギ、チドリなどの多くの渡り鳥が飛来するため、環境庁の「国設の保護区としたい」との意向に、県がこたえることにしたものだ。ただ、地元の習志野市は、干潟が悪臭を発生する元凶となっていることから、周辺の住環境を整備する目的で干潟の埋め立てを検討しており、鳥獣保護区の指定を認めない考えだ。

習志野市は依然反対

谷津干潟は三十三ヘクタールと面積は広いが、周囲がすでに埋め立てられているうえに、周辺からの家庭雑排水が流れ込み、水質が汚濁、悪臭が発生している。半面、鳥のエサとなるゴカイなどの生息には適しており、豊富なエサを目当てに、春秋には多いときで八千羽もの渡り鳥が飛来するという。

千葉県は現行の第四次計画（五十二―五十六年度）で、東京湾で貴重な渡り鳥の楽園である谷津干潟を鳥獣保護区の指定対象としたが、習志野市の同意が得られず、指定を断念した形となっている。

にもかかわらず、県が再度、谷津干潟を鳥獣保護区の指定対象とする方針を固めたのは、環境庁の指定への強い意向を受けたものだ。

しかし、習志野市の反対は依然強く、県が鳥獣保護区に指定するには公聴会などで示された地元の意見を尊重しなければならないことから、第五次計画が県の方針通り決まっても、県が指定にこぎつけるまでには、かなり難航するとみられる。

今度こそ指定を

五年前、国会の「建設小委員会」において、千葉一区選出の議員より、谷津干潟保存に関する質問がなされた。それに対して、環境庁・鳥獣保護課長より、谷津干潟を「国設鳥獣保護区特別地域」とする計画の答弁がなされた。そして、調査費は、全国から六ケ所が上げられ、谷津干潟もその一つに入っていた。しかし、その後、ある何者かの防害によりて、調査費が谷津干潟よりはずされ、第四次の事業計画中には指定されなかった。

習志野市が、下水処理について何ら責任ある、具体的対策を立てず、全て国・県に肩代りさせようとしているのが、現実である。

愛護研究会の事務所ができました

干潟のすぐ近くです。歩いて三十秒ぐらいの所です。六畳・四畳半・トイレと台所があります。小ぎれいで、小さな庭があります。引っ越しが終り次第、森田はここに住みます。十四年間勤務していた新聞販売店をやめたので、今まで身のふり方を考えていました。

谷津干潟のことをどうするか、それが最も大きな問題でした。母は、だいぶ以前から、「三郎、お前がいくらジタバタしたってオカミにかなわないんだ。海のおかげで、どっかからお金をもらったか？。漁師だってお金をもらっても、何にもしてないだろう。それをどうしてお前が自分を犠牲にしてやんことあるの？」と言っていました。でも、時々は、「お前が自分で決めて、信じてるもんをやるんなら、やれとも言えないけど、やめろとも言えないなあ――」とも言っていました。

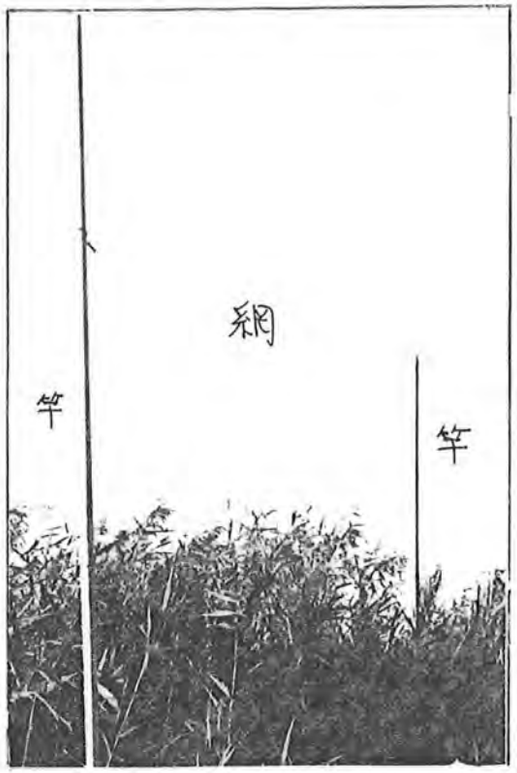
まだ、どのような仕事をするか、決まっていません。干潟と仕事、ここは全て、私一人しか決めてくれる者はいないのです。

埋め立て地のカスミ網

石川勉氏から連絡がありました。森田はすぐ現場に行って確認して来ました。

ヨシ野の中に立ててあり、大きさは三メートル×四・五メートくらいでした。網には何もかかっていませんでした。埋め立て地では、私としては初めてです。他の人も、今まで例がなかったということです。これからも注意していきます。

撮影　九月中旬
場所　幕張C地区
国鉄京葉線工事のそば



撮影・写真提供　高木世史（学生）

谷津干潟のダイサギ

水面スレスレに飛んでいる。とてもうまくとれている写真です。ピントは申し分がありません。明るさもすばらしい。ある程度キョリがあって、動いている鳥を、このようにピントぴったりにとることは中々できるものではありません。

ダイサギのすぐ下の水面が波立っているのは、ダイサギの姿を見て、驚いて逃げまわる魚の群によるものです。谷津干潟では、どこでも、こういう光景が見られます。

（豊かさの傲慢さ）

9/11 毎

完成したばかりの長編記録映画「インド洋上に生きる――モルディブ」（カラー、二時間半）を見る機会があった。

モルディブとは、昨秋、米不足が伝えられ、日本でも救援運動が起こったあのモルジブ共和国。赤道直下から八百二十㌔にわたって散らばる二千以上の小さな島々からなり、人口は十五万。GNPは世界で下から二番目。ほとんどの島に電気も水道いない。平均寿命も日本などと比べたらはるかに短い。主要産業は小さな船によるカツオ漁だから、今後の「成長」はそう望むべくもない。

島の休日。こざっぱりしたモルジブの人々＝深瀬昌久氏撮影

なった人々の生活はきびしい。カツオ漁もサメ漁も危険がともなう。コメは腐敗が早く、保存がきかない。海が荒れれば船はこない。飢えはすぐに迫ってくる。熱帯病もまだ絶滅されてはいない。

この映画を見て東京・青山の街へ出ると、そこはビルも人々も「豊かさ」そのものだった。その後しばらくして、第三回太平洋地域首脳会議が日本の低レベル放射性廃棄物の海洋投棄計画に反対する決議をした。当たり前のことである。どこの国も、よその国の「ゴミ捨て場」になりたくはなかろう。しかもそれは将来にわたって、悪影響を及ぼす心配が大きい。

他国に迷惑をかけなければ維持していけない「豊かさ」とは何なのであろうか。われわれは、だれにも迷惑をかけずに「貧しく」生きているあのモルジブの人の生活そのものの海を奪ってしまおうとしているのではないか。そんな権利がどうして日本人にあるのだろうか、と考えた。（良）

☆「インド洋上に生きる――モルディブ」上映会　二十一、二十二の両日午後一時半から新宿東口の紀伊国屋ホールで。問い合わせは03・405・7158、青山緑音センターへ。

画面に映し出される彼らは太ってもいないが、特にやせているわけでもない。均整のとれた体に、インド系と思われる、おだやかで美しい表情を見せている。質素ではあるが、実に清潔そうだ。イスラムの安息日に、真っ白なシャツを着た彼らの充足した顔は、実に「豊か」にみえるのだ。

ある島でのマホメットの生誕祭。年に何度とない大ごちそうを盛った大きな飯台をかかえた男ばかりが集まる。彼らは礼拝のあと、少しだけそれを口にして、飯台を重ね、日本人がやるのと同じように大きなふろしきで包んで持って帰っていく。妻や子供たちのために――。

この国の自然――海と一つに

56.9.11（毎日新聞）

ふかんど

第119号

1981.11.10

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ー三五ー六
電話0473ー三八ー六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

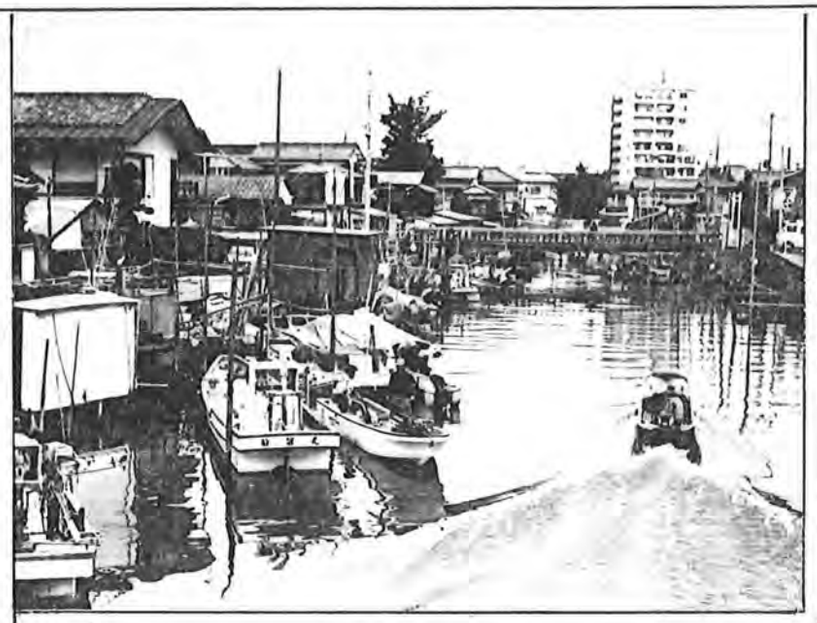
漁師まち

船橋市湊町という地名の所、その辺一帯がそうである。海老川には今でも、川の両岸にたくさんの魚船がつながれている。

川上に向って、左側が湊町、右側が宮本町である。宮本町がわには漁師は殆んどいない。宮本町は、私が生まれ、そして育った所である。今はあまり変らないが、私が小さかった頃は、海老川を境にして、宮本と漁師まちでは家の感じや通り道のようすが、ずい分と違っていたものである。

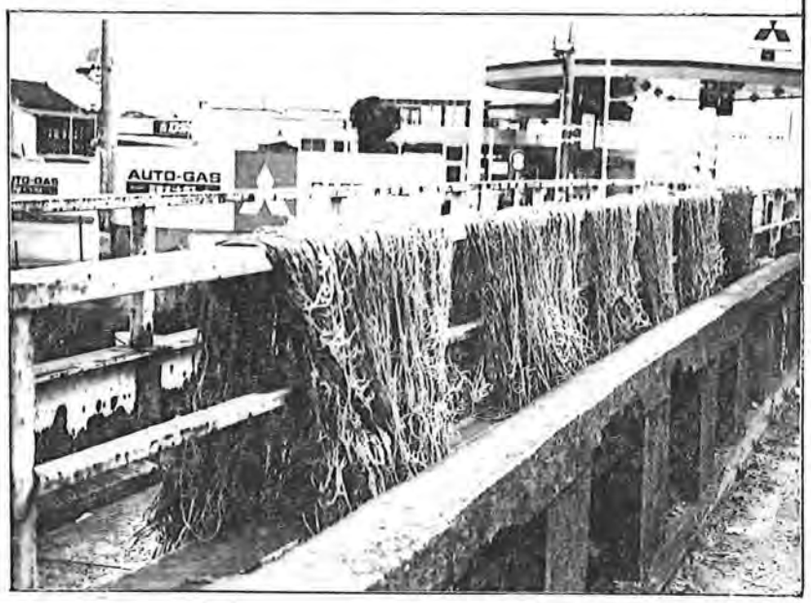
昔の漁師まちは、殆んど地面なる道で、道端や軒下にはいたる所、「海で使う道具」などが置かれていた。又、道という道は貝がラが敷かれていて、白っぽい道になっていた。地面が全く見えない、貝がラだけの空地や道も多かった。

小学校の二年頃から、私は母の手伝いで、この漁師まちを新聞配達していた。その頃の漁師は貧しかったのだろう、ノリがとれる寒い時期の半年間は新聞をとり、あとの半年は新聞をとらない家がかなりあった。漁師まちは他の町と違う特異なまちの性質があった。



船橋ばしから見た所。中央の橋は「八千代橋」。下を流れる川は「海老川」です。

船橋ばしにかけられたノリの網。14号線が、海老川と交わる所です。



〈当時、使い終ったノリ網を原っぱに干した。まだノリがたくさんついていて、ぼくはザルで山盛りをとった。〉

力モの飛び立ち

谷津干潟では、毎日夕方になると、今まで干潟の中にいた力モたちが、大小の群をつくって次々と飛んでいってます。京葉港の沖に行って、夜エサをとる為です。そして又、明け方に帰って来ます。

初めてギプスをとった日

白倉の山の中

それまでの私は、外を出まわると、帰って来てからギプスのかかとのゴムを、ぞうきんなどでふいて、それから家の中に入っていた。いくらふくとは言え、さんざん外を歩きまわった「その足」で、家の者には

このワラぶき屋根の母家が、房総自然博物館である。ここが活動の中心である。

すまないと思っていた。が、当の私とても、病院の中で囚人の如き生活をしていたので、とにもかくにも外へ出たかったのである。

雨が降っても出た。しかし、両手は松ば杖でふさがれているのでカサはさせない。ぬれると、ギプスは石こうなので、たっぷりと水を吸い込む。足は気持がわるいし、ずっしりと重くなるのであった。そんな毎日。

52年の暮れ、白倉で正月を迎えようと思って行った。その頃、高口さんという人がいて、「森田さん、ぼくが自転車にのせて行ってやるよ。だからおいでよ」とさそったからである。高口さんがずっと付きそってくれた。雨の後の林道や、ドロドロの細い急斜面・岩場、コケ、草の茂み、砂の階段、落葉などの所を歩いた。大汗をかいた。足をドロだらけ。ギプスは二つに切ってあって、ホウタイを巻いてあった。気持が悪いのでギプスをとってしまった。細い、軽い脚が出て来た。

日常生活の中では、私達は、とかく目にうつる事ばかりに注意や思いが走ってしまい、それに気をとられてしまうことが多い。そうすると、その事の原因が外がわにあるとだけ思うことなく思ってしまう。気をつけよう。

52・4・9 毎日新聞

編集者への手紙

強く生きるということ

―進学した教え子におくる

守屋 孝子

前任の小学校で教えた子どもたちが中学三年の三学期を迎え、高校受験の日が近づいた時、私は一人々々の顔を思い浮かべつつ、励ましのはがきを書いて、ベストコンディションで受験できますようにと祈っておりました。

三月になって、つぎつぎと高校決定の知らせを受け、ほっとしていたある日、M君のお父さんから、次のような手紙をいただいたのです。

「度々のお手紙誠にありがとうございました。Mはおかげさまで都立T高校に決まりました。Mは先生にお世話になっていた当時と違い、大変悪い方に変わってしまいました。中学二年の初めごろより勉強はしない、教室から抜け出す、遅刻はする、偏食は激しくなる、ということが三年の初めごろまで続きました。一時は精神病院に入院させようとまで考えましたが、

先生方の温かいご指導のおかげで三年の夏ごろより徐々に回復しました。しかし今でも完全ではありません。本人はすべて言語障害が原因と言います。どもりのうえに言語が不明りょうなため、授業中の質問の答えは級友にわからず、どっと笑われるというのです。それ以来、他人との対話を極端にきらうようになり、現在に及びました。『どうせ勉強してもオレはだめなんだ』と思いこむようになったのです……」

私はこの手紙を読みながら、ぼう然として胸が詰まってしまいました。小学生のころのM君は明朗で屈託なく、天衣無縫ということばがぴったりする人気者でした。どもりとはいえ、落ちついて話せばよくわかり、級友が笑ったり、さげすんだりすることは一度もありませんでした。ユニークな発想を持ち、いつも楽しいふん囲気を作ってくれていたM君が中学生になって、そんなに悩み苦しんだとは……ほんとうにいとしくてなりません。私は折返しM君に手紙を書きました。

いろいろなハンディを背負いながら、強く生きている人々のこと、私自身の現実の苦しみから脱却（私は大手術のあと休職中の身）過去の劣等感からの克服等々。高校生ともなれば、もう大人への第一歩。世の中の厳しさに負けない精神力の持主になってもらいたいことなど書きながら、祈るような気持になっておりました。

あのユーモア少年M君が、苦しみの極限まで行って、再び三年の夏ごろには何とか立ち直ったということは、周囲の温かいご心ぞえと、本人の意志の強さと、素直さによるものだと思います。

「まだ完全に回復したのではありません」という父親の手紙の中にこめられている不安を残して高校生となったM君、世の中にはもっと大きなハンディを背負って進学した人もたくさんいるのです。人間は大なり小なり、劣等感にさいなまれながら大きく飛躍し、進歩しようと努力しているのです。劣等感を克服することを忘れ、それを転嫁することが即ち友人を傷つけることにつながることの怖さに思いおよんだ時、私は進学して新しい学校で学ぶようになった皆さんに、どうしても手紙が書きたくなったのです。

一人は万人に心を配り、万人は一人に心を配る。この心を忘れずに、いつも相手を思いやり、友情の輪をひろげてください。学生時代につちかわれた友情のきずなは、何ものよりも強く、人間一生涯生きぬいていくうえに燒たびも希望のともしびをともしてくれることを信じます。

（教員・54歳・東京都杉並区）

ふかんど

第120号

1981.11.11

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五ノ六
電話(〇四三)一二ノ六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

これが広い干潟の見える大きな榎

↓印の木がそうである。

今から二十五年以上の昔、そこに登って、広い干潟を見わたし、潮の具合を見て、大きな声をはり上げて叫んだのである。

だが、今はそう見えない。海のそのは、全く見えない。この前、ちょっと登ってみたが、ビル、つまりコンクリートやブロックが、「灰色のその」が圧倒的に多く目につくのである。それに、とにかくうるさい。激減したのは、一目見て、「緑色」である。びっくりしたくらい少なくなっていた。

榎のまわり、広い範囲を見ると、木の数が少なくなっている。数だけではない、一本ノ木が、小さくなっているのだ。勿論、全部ではないが、かつて「大きかった木」が、いわゆる縮んでいるか、さもなくば「スケテ」いるのである。聞けば、枝や幹などが枯れてしまうのであるとのこと。それで折れたり、枯れた所を切ってしまうのだそうだ。

私がそこに行ったのは夏だった。榎をはじめ、すぐ近くの木を、木の葉の茂みが小さく、そして、こんもりでなく、「茂みがうすい」のである。たとえば、この榎にしても、私の小さかった頃は、夏などここに登れば木の葉の茂みで、私の身体は下のどこから見ても見えなかったのであった。幹や枝にしても、ごく一部が見えるだけで、写真ほどの距離から見るとこんなどんではなく、緑の木の葉の〝カタマリ〟に見えたのだ。まわりの木も、この榎と殆んど変りはない。

榎の下は墓地である。小ぎれいな、サッパリした所になっていた。いかにもオバケが出て来そうな感じは、あまりしなくなっていた。草ボウボウの所がなくなってしまったせいだろう。それに、木を植えて囲ってあったものが、ブロックやコンクリートに、あるいは鉄やアルミの柵に変っている所が多いせいもある。

塔婆や墓石などがキチンとしているところを見ると、私達がしたように、塔婆を引っこ抜いたり石を倒したり、そこいらじゅうの木に登ったりするイタズラ小僧といなくなったらしい。試しに私は、木の梢をよく見て歩いてみた。が、「あのヤンマたちの姿」は、ついぞ、ただの一匹すら見ることはなかった。

〈たくあん石をなくしてしまい、その代りに、そっと墓石をタルの上に置いておいたら、夕にぶんなぐられて、墓場へ返した。〉

いま知る〝海の重さ〟

元浦安漁民の集団密漁

漁業権を放棄しながら、それでも海にしがみつく漁民たちの表情には、かつてのおうようさはなく、代わりにみじめな思いさがあった――。さる十日、埋め立ての合間にわずかに残った船橋沖の漁場で、アサリを密漁中、千葉海上保安部に漁業法違反で一斉逮捕された東葛飾郡浦安町の四十人の元漁民たち。六十歳を越える老人六人を含め、ほとんどが四、五十歳代の中、高齢者ばかり。インフレと不況のなかで、四年前の補償金はすでになく、転業も思うにまかせなかった人たちだ。今、彼らは改めて奪われた海の重さに気づいた。だが、補償金をもらって権利を正式に放棄した以上、彼らには、怒りを覚ることも許されない。山本周五郎の名作「青べか物語」の舞台となり、漁師町の活気を誇った浦安町には、元漁民たちの挽歌ばかりがあるばかりだ。

（桝井成夫記者）

60歳代が6人

四十七人という大量逮捕は、千葉海保でも初めてのことだった。二十四歳の若者もいたが、六十歳代（六人）、五十歳代（七人）、四十歳代（十五人）と、大半は中、高齢者。その人たちを浦安町に訪ねてみた。

狭い掘割に、数は減ったものの、名物のベカ舟が並ぶ。だが、人影も少なく、ベカ舟も放置され、舟板も腐食した廃船が多い。

サーキット族が爆音をあげ、わがもの顔に占領する無人の埋め立て地。そのすぐそばに、黒くよどんだ掘割をはさんで寄り添うように旧漁師町がある。貧しながらの、くねくね曲がった狭い路地、古い家と、新築の家、アパートが混在する。

新旧がいり混じる旧漁師町で、訪ねた家は、判で押したように、

補償金消え果て……

だが隠せぬ甘えとずるさ

色あせた緑や青のトタンで壁を覆っており、二階が作業場、二階建ての小さな古い家だった。

「仕方がねえ」

捕まったなかで、最年長のA さん（同町堀江）。明治四十一年生まれ、六十六歳。四年前、約五百万円の補償金をもらった。「この四年間、いろいろ手を尽くしたが、年も年だし、こんな老人には働く場所もなかった。恩給よくやれねえし、家でブラブラする日がほとんどだなあ。それに、不況で、最近は草むしり程度の仕事もない。つい、日銭になる密漁をやっちまった」と老人はこう吐き捨てるように言ったあと、目を慈しせ、「漁師が漁師じゃねえんだ。早く帰ってくれ」と、もうどんな問いも拒否した。

Bさん（六二）。八百万円をもらって、「何とかなるべエ」と、そのほとんどを家の新築につぎ込んだ。

生き方の問題

ついに同漁協は三月七日、千葉海保船橋分室に告訴した。

「もう、金は何も残っていない。役場の掃除、公園の草むしりもない時代。仕方がない。正直者ばかりが捕まった。運が悪かった」。Bさんは、ヘドロのたまった埋め立て地の中の〝穴場〟をさがして、わずかにとれるアサリ採りで生計を立てている。

数時間で二万円近くにもなるというアサリ漁。一様に「仕方がねえ」を連発する漁民たち。追い詰められた表情のなかに、奇妙な甘えと、こうかつさが時折、顔を出した。

同じ仲間だが

浦安第一、浦安漁業組合に、かつて漁民が千六百人もいた。四十六年七月、一人平均八百万円、総額百二十億二千八百万円の補償金で漁業権を放棄、組合も解散し、九九年まで守った京葉港第一期工事で、土地と変わった。

密漁のあった京葉港二期工事分にあたる漁場は、船橋漁協（松本義信組合長、二百人）が権利を持っているが、同漁協もすでに四十七年に、約百五億円で漁業権を放棄しており、現在は、不況で工事量工が遅れているため、一年だけという条件で漁が許されているという不安定な漁場だ。

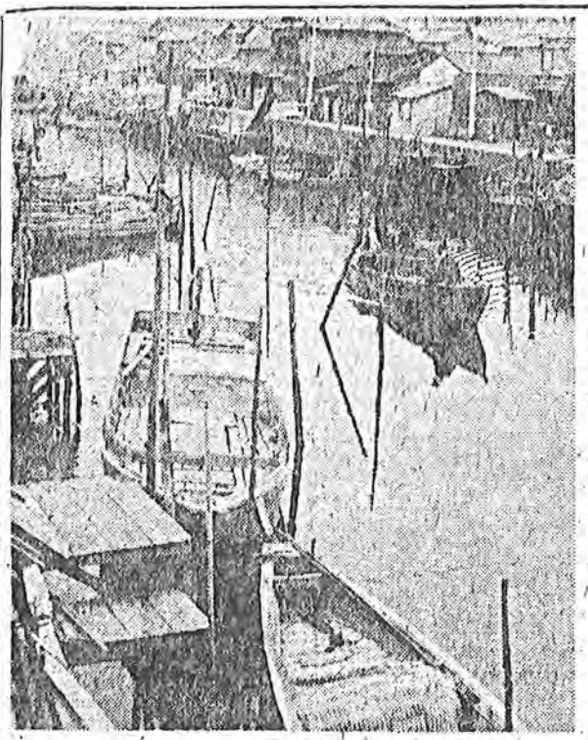
船橋漁協理事は、「浦安とわれわれは同じ運命だ。だから、まあまあと大目に見ることが多かったんだ。だが、組合員の突きあげもあり、もうがまん出来なかった」という。

「仕方がない」と、密漁の取り締まりにはウンザリするばかり。埋め立てが始まるまで、恐らく際限なく狭い漁場での奪い合いが繰り返されるだろう。

県水産部では、こうした密漁に対し、「浦安の漁民の心情は察するに余りある。だが、冷酷なようだが、公的には何もできない。元漁民とはいっても漁民でない以上、仕方がない。何も解決しないが、個々の生き方の問題になる」（千葉貞同部次長）という。

翌年八月、この漁場の短期免許（一年）について漁業調整委員会が審議、決定する。しかし、「浦安の元漁民について、入るかどうかを考える余地はない」ともいう。

座ったままじっと死を待つだけ――それが、漁でしか生きられない浦安の元漁民の運命であり、それは実は、半年後の船橋漁協の運命でもあるのだろうか。



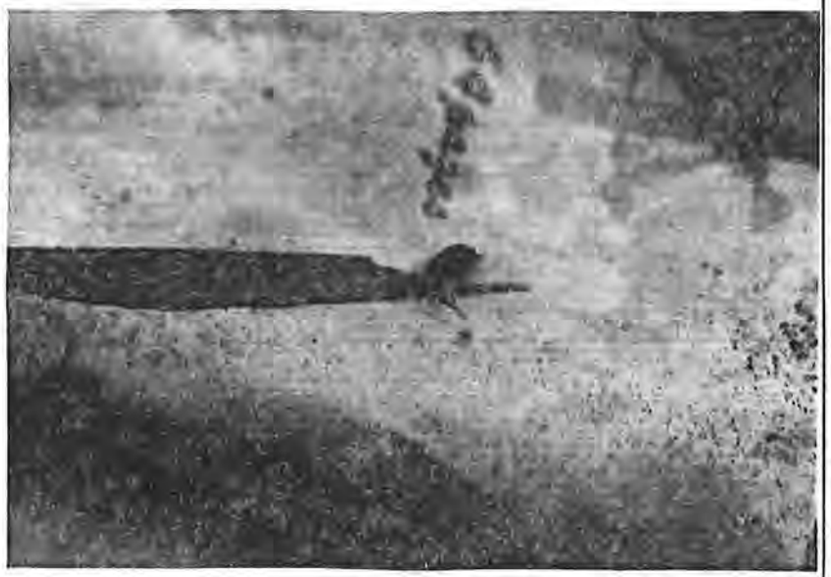
活気を失った掘割。浮かぶベカ舟も廃船が多い

（資料）

1975.4.28 読売新聞

浦安と船橋の漁民は、昔から仲が悪かった。そこへ来たのだからよほどのことだろう。

自然緑地のダンゴムシ



上の写真は、草ムラの中にあった、セメントの袋をひっくり返したものである。とたんに、びっくりしたように、ダンゴムシの群とハサミムシが逃げていくのであった。

彼らは、私達人間にはゴミでしかないものでも、「生活の一部」としてとり入れてしまうのである。これはなにを、草地のダンゴムシだけでなく、干潟にすむ、ゴカイ、カニ、フナムシ、カキなどもそうである。埋め立て地は、植物や渡り鳥だけでなく、このダンゴムシがそうである如く、地下でも内陸性へと変りつつある。